大正十三年十一月廿二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十五年二月廿七日印刷納本　大正十五年三月一日發行

婦人運動

第四卷

職業婦人社發行

三月號


効力舶來品以上の
クラブ煉歯磨
一番よい歯磨！
朝と食後の含嗽用
クラブ水歯磨

巻頭雑記

大阪に出來た職業婦人聯盟の上に、今や全國の職業婦人の眼がつながりかゝつてゐる！と云つても過言ではないでせう。

婦人問題と云へばいつでも、無理解な冷笑と白眼とでしか迎へることの出來ない不愉快な今の社會のまつたゞ中で、さういふ無理解とたゝかひつゝ、一方安い賃銀と、長い勤務時間と、煩らはしい雑用の連絡で疲れ切つてゐる身体にむちうち乍らやつてゆかうといふのですから、ほんとに困難な仕事であるでせう。

□

然し、どうかして闘ひに利あつてほしいといふのは、ひとり私たちばかりの願ひであらうか。

どうぞ、自重して、たゝかひを進めて行つて下さい。たゝかひの最後まで、一人の落伍者もないやうに、固い固い握手で進んで行つて下さい。否々、最後の一人までもうつかり漏らすことのないやうに網羅して、水も漏らさぬ用意周到さで、一歩又一歩のあゆみを進めて下さい。

□

『思ふこと云はざれば、腹ふくるゝ』とは、何とうまく云ひ放たれた言葉でせう。

長い間壓しつぶされてゐた婦人が、やうやく頭をもたげかけて來た今、あれもこれもと、空に向つてゞも云ひたいと思つてゐることがどんなに多いか知れないのです。

□

さうして、自分と同じやうな喜びに在る人を見ると、ついつりこまれて自分まで嬉しくなるやうに、悲しみでも、怒りでも、悲しんでゐるのは（或ひは怒りに燃えてゐるのは）自分一人ぢやない、外にも、同じやうな悲しみ（或ひは怒り）に打沈んでゐる人がある！ことを知るのは大きな慰めであり、力であります。

女として、長い間同じやうに虐げられて來た私たち婦人が、さういふ慰めとなり、力ともなるところのほんとうの意味での私たちの機關をもつ必要は、今更喋々するまでもないことでせう。

□

このとき、わが大阪職業婦人聯盟が、本誌『婦人運動』に依つて、同志を喚び、同志に話しかける申合せをして下さつたことは、喜びに堪えません。

更に、さらに一個人のために一團体のために、又全國の婦人大衆のために、忠實な機關として、慰めとも、力とも、光ともなるやうに働いてゆきたい。私たちの祈りはこの一つより外ありません。どうぞ皆さん、一つ心で本誌を待つて下さる讀者が一人でも殖えるやうに、お力添を頼みます。

誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部　貳拾五錢（郵税五厘）
半年分　壹圓四拾錢
壹　分　貳圓八拾錢

送金法

誌代は必ず前金の事。
送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

大正十五年二月廿八日印刷納本
大正十五年三月一日發行

發行編輯兼印刷者　奥むめお
東京市外蒲田町女塚二四七番地

印刷所　單式印刷合資會社
東京市本郷區元町二丁目四番地
電話小石川二三九三番

發行所　職業婦人社
東京市外蒲田町女塚二四七番地
振替東京六四一六〇番



（巻頭言）

國際婦人デーに

世界の勞働婦人によつて記念されてゐる、三月八日の國際婦人デーが來た。

×

今から九年前のその日、ペトログラードで、紡績女工の大示威運動が行はれて、ロシア革命の火ぶたは切られたのである。

×

國際的特殊國であるわが國では、大正八年の國際會議のとき採擇され、改正工場法の制定にあたつて、三ケ年の猶豫を設けておいた婦人及少年勞働者の夜業禁止法案を、期限が切れた今日まだ、實施しないでゐるので、日本勞働總同盟では、議會に向つて請願運動をしてゐる。

×

而も、春の議會は女に緣の深い松島遊廓の移轉問題から、憲政會も政友會も本黨も、どれもこれも金子のツルにからみついて醜狀をさらけ出して大騷ぎ中とある。

×

記せよ、去年の國際會議に、婦女賣買の禁止案に、除外例を求めて出たのはどこの國であつたか？

時評

一、「全國女子教育促進同盟」に望む
二、結婚生活の破綻と職業婦人
三、慈善事業の破産

奥むめお

「全國女子教育促進同盟」に望む

全國の女子教育關係者が、二日間にわたつて大會をひらいて女子教育促進のために——と云つても、この大會は主として女子の高等教育促進のために企てられたものである——いろいろ申合せをしてゐるが（第四一頁參照）この會の趣旨や目的については何人も異論を挾む餘地がないほど當然すぎることで、私たちも女の一人として、全國女子教育促進同盟の運動を支持して、一日もはやくその目的が達成されるやうにつとめたいと思ふ。

が、これだけ各方面の教育關係者を網羅しながら、その實際運動としてとりあげられたものが、演說會と議會運動だけにとゞまつてゐることは、如何にもあつけない。

これは女子學生聯盟の運動に對してもつねに、抱かせられてゐる不滿であるが、今日、わが國で女子の高等教育機關が男子に比べて非常に少ないことは今さら云ふまでもないことであるが、その非常に少ない高等教育の諸機關にさへ、入學を志願する婦人の數は、男子のそれに比して、はるかにはるかに少ないのである。

むしろ、志願するだけの、志願して就學が出來るだけの自由を惠まれてゐるほどの婦人は、みなそれぞれの學校に落ついて勉强が出來るまでに、曲りなりにも、今日では女子高等教育の門戶は開放されてゐると云つた方が妥當かもしれない。（女子のために開放されてゐる男子

の大學を利用する女子の何と少ないことよ、たまたま入學しても、卒業するまで業をつゞける者が何十分の一にしか當らないといふ事實をみよ、これは、女子の一人として口にするさへ心苦しいことだ）

今日では、女子のために高等教育の門戸が未だ澤山に閉ぢられてゐることを慨く前に、まわりの者の無理解や舊式な女性觀から高等の教育をうけることを許されないでゐるもの、更にそれに必要な學資金のないもの、時間の餘裕のないもの等の方が遙かに多いのであることを私はこゝに云ひたい。

東京市社會局では婦人向上運動として『婦人講座』を初めたが、定員百名といふのに三百名餘の申込があつて市電自動車の車掌、煙草專賣局の女工、教員、家婦、女中、事務員、産婆、商人と雜多な婦人が聽講してゐる。かういふ婦人の成人教育を、お役所仕事に任せておかないで『全國女子教育促進同盟』あたりが、あらゆる便宜を持寄り合つて各所でこれを行ふのであつたら、非常に有効なものであらうと考へられる。

女子學生聯盟なども、帝大のセトルメントが、あらゆる意味で惠まれない人たちのために乏しい時間を割いて働いてゐるやうに、多くの修學の自由をもたない女工や主婦らのために、惠まれて受けることが出來たところの自分たちの蘊蓄を傾けて捧げるといふ風にしたら意義多いことだらうと考へられる。正確な統計をあげることは出來ないけれども、小學程度より進んで中等程度の學校に入りうる女子は、全体の十分の一あるだらうか、更に中等程度より高等の學校に進みうる女子は、恐らくその十分の一にもあたらないに違ひない。安部磯雄氏は、本誌一月號で、悉しく統計的に説明してゐられる。參照

私たちの願ひは、大衆の女子にひとしく教育の恩典を與へて人間としての自覺をよびさますことでありたい。

結婚生活の破綻と職業婦人

最近、新聞紙の傳へるところに依ると、東京市内の各所にある婦人相談所へ來る事件に、離婚の問題が非常に

多くなつて、そのために係員は忙殺されてゐるといふのである。

これを、いはゆる爲政家や敎育家などに云はせるならさしづめ、貞操觀念が稀薄になつたのだらう、とか、男女道德が頽廢したのだとか云ふことばで片附けてしまつて、その思想的善導といふことを唯一の解決策として、あゝもしやう、かうもしなければならぬといふのであらうが、事實は豈はからんや、その大多數は、世間の不景氣といふことに原因してゐる、といふに至つては、單にさうした思想的の善導沙汰位では、解決される問題ではない。

昔、封建時代に社會の中堅をなしてゐた武家階級では家錄といふものがあつて、家族の生活を保證するのであつた。從つて女子が、結婚して家庭に入ることは、卽ち生活の保證を得ることであつた。これは單に、武家階級ばかりでなく、一般の庶民階級の女子にも相通じた現象であつた。

が、今日のやうな資本主義制度のもとにある自由競爭の時代には、一般の家庭といふものが、決して女子の生活を保證するものでなくなつてゐる。それにも拘らず女子がかの封建時代の約束をそのまゝに、生活の保證をあてにして結婚生活に入るから、そこに破綻が起きて來るのは當然といはねばならぬ。資本主義制度が爛熟すればするほどこの現象がより廣きに亘つて、より深刻になつてゆくことも必然である。

そして一般の無產婦人は、この社會的事實を前にして、單なる生活のための方便としての結婚觀から開放されて何らかの方面に經濟的の力を持たなければやつてゆけないやうになつてゐるのである。

爲政家や敎育家たちから、男女道德の頽廢とか、貞操觀念の墮落とか批難されてゐる問題も、一歩深くつき込んで考へてみるとき、そこには、當然起つて來なければならぬ、社會的、經濟的原因が潜つてゐるのであつて、職業婦人問題、婦人解放問題の如きも、單なるはねつか

へりや、飛び上りもの丶運動でないことは、勿論である。

慈善事業の破產

東京下谷の同善小學校は、明治十九年から貧兒敎育を初めてゐる因緣の深い特殊學校であるが、この四月に創立四十年の記念會を開くために父兄會を招集した。ところが父兄側から次のやうな要求が出て、滿場一致で即決可決したといふ――『貧乏人の學校と世間から馬鹿にされるのは非常に苦痛だから、これから普通小學校の通りに授業料を徴收するやうにしてほしい』――と。そして泣いて日頃の苦痛を訴へるものさへあつたといふ。

然し、困つたことにこの學校は、財團法人の慈善團体の經營するもので、規則第一條に『貧兒敎育のために授業料を免除云々』

と明記してゐるので、父兄側の要求を入れるとすれば財團法人の組織を解体せねばならないのださうである。

偖つて、朝鮮災害慰問婦人會が出來たとき、某女史が會の代表者になることまで自ら承諾したのを飜して、急に身を引くとき、その理由の內の一つとして、由來朝鮮人は繼子根性の强いもので（誰がかはいらしくもない繼子根性などを朝鮮人に植付けたのだ！）饑饉や水害の慰問をするとしても、餘程大きなものを送るのでなければ反感を買ふても、喜ばれることは出來ないと思ふ。然し今、朝鮮のために莫大な慰問金を集めるために働くといふことは、いろんな事情がそれを許さないので、いつそ身を引くことにしたといふことを云はれたことがある。

今でも、慈善團とか、同情週間とか、あらはに慈善を看板にした奉仕が行はれてはゐるが、それに對する社會一般の目は、以前とはまるで違つて來てゐる。

一体、慈善とか同情とかを、一段高いところから、低いものに與へて、感謝をうけるものと考へるのが大きなまちがひで、何人にもさうした優越感を滿足させるやうな存在は許されない筈だ。與へる者の尊大、受ける者の卑屈、時代は次第にこの慈善と云ふ奴隷道德の存在を否定しつゝある。

米國に於ける戰鬪的婦人參政權運動の活動

メリー・ウインサー

一

婦人が參政權を獲得する前に、反對者は常に、婦人が參政權を得れば、女らしさを失ふといひます。しかし、それは口實で實際にそのために婦人が婦人たる職分をないがしろにし、婦人の本來の美點を失ふことはありません。日本がほかの文明を受け入れて近代的になつたにかゝはらず、日本固有の美を失はぬと同樣に、日本婦人も決してその美德を失ふことはあるまいと思ひます。私どもが參政權を得たいと望むのは獨身者やその他の可哀さうな人々が無暗に望むのではなく、母として希望するのだといふことを認めてほしいのであります。

次に、私どもが、いかにしてこの參政權を獲得したかの方法を述べませう。運動はアメリカ四十八州中西の方から始まりました。ある時にはこのやうな小集會で、ある時には劇場で、またある時には大統領宛に電報を發したり、或る時にはバザー、ペエジエントをしたりしました。保守的の人を驚かしたのは、フイラデルフイアやシカゴその他で、女工、敎師その他大勢の婦人が集つて示威運動をしたことでした。

二

しかし、かやうな方法は中々時がかゝるので、もつと手取り早い方法をしようといふので、こん度は議會に對

して運動を開始しました。ワシントンに本部を置いて當分はげしく運動したものです。一ケ年間といふものをかうして運動に努めてゐましたが一九一七年の一月十七日に大統領ウイルソンに面會することが出來ました。そこで私共は、彼にこの參政權が通過するやうお骨折を願つたのでしたが、彼は『もつと一般の人がこの問題に集中しなければ』といつてこばみました。

この面會によつて、私どもはこれはどうしてもまづウイルソンを動かさねばならぬといふことになり、自由、平等、デモクラシー等いふウイルソンが常に用ひる所の美しい詞を旗に書いて、それを持つてホワイト、ハウス――大統領官邸――の前に皆で立つことにしました。これを一月から六月まで續けましたところ、私どもは檢束投獄されてしまひました。かうして百五十四人の婦人が遂に揚げられたのでありますが、私どもはどうして投獄されねばならなかつたかを了解することが出來なかつたのであります。なぜなら、私どもがかういふ方法をとることが法律に觸れるものかどうかは始める前に辯護士に聞いて、決して惡くないことをたしかめてあつたからです。ではどうして、つかまつたかと申しますとその理由とする所が頗る面白いのです。往來で交通を邪魔をしてはならぬといふのです。所が私どもが立つた所は、廣い街で、私どもがもつと大きな體にならぬ限りはその理由に相當しないのでした。

私は始めは田舍の牢獄に、次にはワシントンの獄屋に入れられました。日本の牢獄はどうなつてゐるか存じませんが、私の國では改良されねばならぬ點が澤山あることを知りました。田舍の牢屋では飢と寒さに苦しめられました。殊に食物の惡いことはお話にならぬ程で、いろいろのものが腐敗してゐたり、朝飯のオートミルの中に蟲が十一匹もゐることさへありました。ワシントンの牢屋では鼠としらみ、南京蟲に苦しめられました。

かやうな間にも外では、私どもの同志が間斷なく運動を續けてゐました。そしてまたまた投獄者が續出したの

です。その中には名のある婦人もあつて、かやうな知名の人達が投獄されたことは社會を驚かさずにはゐませんでした。そして、これ等の人達の友人や知人が絶えず牢屋をおとづれたので、私どもはこの牢獄の慘狀をそれ等の人に話しました。處がこの人達がこのことを議會で話したりウイルソンに訴へたりしましたので、大きな騒ぎになつてしまひました。この問題は新聞の第一面を大きく飾る結果になりました。

遂に議會はやむを得ずして婦選を通過させたのであります。

正義、自由を得るためには、私どもが獄屋に苦しんだこと等は何でもありません。婦選を獲得することは愛國の精神です。國家の制度をよりよくすることです。世界が男子のみで作られたのならいさ知らず、國家は男女で成つてゐるのですから、婦人にも男子と同じ權利を與へられねばならぬのは自明の理です。

三

次に、その獲得した權利を私どもがいかに用ひてゐるかをお話したい。アメリカは婦人がよい地位を得てゐる國だとお聞きになつてゐるでせうが、決してさうではありません。アメリカは新しい國でありますが法律は古いのです。私どもは、現在の男子に眞似をしようとするのでなく、この時代はづれのものに反對して立たうとするのであります。その古い法律は現代の男性でも惡いと認めてゐる所のものです。この法律が婦人に對して不正なのは先づ結婚した婦人に取つてゞあります。

財產などの權利が凡て男子に取られてゐます。私どもは結婚した婦人のために次の權利を望みます。

一、彼等の子供の上に夫と同樣の權利を得たいこと。

この規則は、ある州では改革されましたが或る州ではまだ容れられません。

子供の敎育、宗敎、收入等皆父親のいふなりで、死後も後見人を通じて遺言を實行し、母は何の權利をも持たれません。ある所で、男の子が汽車に轢かれました、父

は損害賠償を要求してお金を得たがその金は全然母の手には入らなかつたといふ事實があります。

一、妻が彼自身の收入の上に權利を得ること。商業上の契約の出來ること。

これ等のことも運動をしてゐます。妻が夫の爲に奉仕することは當然のことで、何等の給料を與へてゐません。ある婦人は夫が花を作る手助けをしてゐたが、その夫が死んだ時に、その財產は子に渡され、妻は少しも得られませんでした。ウイスコンシン州で、ある婦人が土地を買つてそれを賣つて儲けたいと思つた。ところが、夫の許可なくして婦人は一尺の土地も賣れぬといふことに氣付きました。幸ひその夫は理解のある人だつたので自分で書いてくれましたが、もし、分からぬ夫であつたなら、折角買つても賣れぬことになつたのでありませう。

一、男女同じ仕事に對して同じ給料を要求する。

同じ能力もあり、同じ學校も出て、同じ仕事をしてゐる時、婦人は割の惡い給料を得てゐます。これは後に男子のためにも不利益になります。何故なら男子は女のために追ひ出される結果になるからです。婦人が家庭で働く時にたゞ喰べるだけで給料を得ないことは、外の社會で働くところの婦人にも影響して、全體の婦人の働きの標準を低めることになります。私どもは國會議員その他の市町村の政治に半數の婦人を置かねばなりませぬ、遂には大統領を出すまで運動しなければならぬと思ひます。

一、商工業やその他、もつと高い職業に機會均等を要求します。

現在では、ある處では婦人の醫者を好まず、辯護士でも婦人は排斥する會があるが、そんなことのない樣にしなければなりません。

四

一、道德的に男女同等に扱ふことを要求する。

私の國では男女が同じ罪を犯した時に、男は平氣で許され、女は罪になるといふことがあります。それはキリスト教の國に反することです。聖書に汝等の中罪なきも

のこの女に石を投げよといつた時、男の中に一人も石を投げる者がなかつたとありますが現在では可哀さうな女に男がいばつて石を投げてゐます。私共は切に男女同權の法律を通過させたいと思ひます。

以上、私がお話をしましたのは、決してアメリカの惡い所を暴露するためではなく日本婦人がこれからいろいろの經驗をする時に、私どももかうしたことをして來たといふことを思ひ出してほしいからです。（完）

婦人の政治運動は政治結社權の要求に集注せよ

ことしも、婦人參政權運動の人たちは、代議士相手の獲得運動に、臨時事務所を、貴族院のすぐ傍の中央ホテルにおいて、水も漏らさぬ警備振だといふ。目下議院内では、田中義一政友會總裁にからまる三百萬圓事件、陸軍機密費問題、松島遊廓問題等を導火線として、スネに傷をもつどの政黨も、この政黨も、すつたもんだの大騷ぎ中で、女の問題どころかえ、と云ひたいどころであらうけれど、そこは又、よろもの、吉例に依つてこの三月十日すぎ頃に、女に關係のある各案——婦人參政權案、公民權案、二十五歲禁酒法案、婦女賣買問題等をひつくるめて上提する婦人デーを催す筈と傳へられてゐる。（當日の議會を見物したい希望の方々は、本社へ申込まれよ、手續をしますから）

×

然し、今さら既成政黨のみにくさにあきれるほど、多數國民はうぶではない。すでに既成政黨の頼むに足りないことを知つた國民は、今やしづかに、眞に國民のための政黨第二次無產黨出現の準備に沒頭してゐるのである。

婦人も、現在のやうな頼むべからざる既成政黨にたよつて、參政權を與へて下さい！のお百度をふむの愚から覺めねばならぬ。

わが國の政治は、普通選擧の實施を轉機として、今、一變しやうとしてゐる。婦人の政治的活動は、普選に依つて初めて有權者となつた無產大衆と一緒にやることに依つてその本道を見出すことが出來るのである！

×

而も、婦人は未だ政治結社に加入することを法律で禁ぜられてゐる。

婦人の政治運動は、當分政治結社權の要求！に集注して進められなければならぬ。

大阪に芽生へた職業婦人聯盟

大阪へ行つたAとB
聞く人　MとN
（まち子略記）

聞く人M『どうでした、大阪は、盛んでしたか』

大阪へ行つたA『えゝ、隨分元氣な人たちの、盛んな會でしたよ、大阪で、あんなに意氣込んだ女の人たちをみやうなんて、わたし、ほんとに思ひがけないことでしたわ』

大阪へ行つたB『ほんとにねえ、東京の私たちのグルツプの靜かな、大人しいのが、今更反省させられましたよ。大阪まであゝして出掛けてゆくのもいゝけれど、もつと足もとをしつかり、固めてしまはなくては、と』

大阪へ行つたA『然し、やつぱり大阪と東京とは違ふのですよ。東京の人たちは、あんなに元氣にはなれませんもの、もつと深くは入つてゆくでせうけれど』

大阪へ行つたB『でも皆さん、ほんとに元氣でした』

大阪へ行つたA『大阪の婦人界は、あんな風に動いてゆくのだつたのねえ……新婦人協會當時會つてゐた人たちとは、まるで空氣が違ふのですもの』

大阪へ行つたB『奥さんつてばね、名流婦人たちに、みんな贊助員になつて貰つて少し出して貰つたらどう？　ですつて。散々荒して行つた人たちですもの、大阪婦人界の建て直しの運動に、それ位のことをするのは當り前でせう、だつて……』

聞く人B『それあさうですわね、ところで、奥さん、あなたラヂオでさういふことをうんと放送してゐらしたらよかつたんですのに』

大阪へ行つたA『まさか、ねえ。それに聯盟の人たちも隨分心配してゐらしたのよ。ラヂオで聞く人が十何萬人あるけれど、みんな、ブルヂョアなんですから、どうぞ、聯盟の出發にあたつて危險なものに思はれたりしないやうに充分注意してほしいつて――

　聞く人がブルヂョアなら、なほのこと、雇主側に對する要求を闡

舌つたらよささうなものですけれど、與へられた演題は『職業婦人の任務』といふので、主として現在の職業婦人に對する不滿や要求をあたりさわりなく話して吳れ、つていふ事でマゴついてしまひましたわ。雇主側に對してこそ、要求も、不滿もかずかずあるけれど、職業婦人に對しては、別に何もそんなものを持つてゐないもの。あれば皆、それは、雇主側がよくしてくれゝば、改つてゆくものばかりですから……と云つて、聯盟の人が、周圍の思はくに就いて、すぎる程の心配をしてゐることは、もつともなことだと思ひます』

聞く人N『井上さんがやめさせられたつて？』

聞く人N『井上さん？』

大阪へ行つたA『あゝ、あの人、とうとう一度も見えなかつたわね、一度お會ひして來やうと思つてゐたのに、つい取紛れて、歸つて來てしまひました。先日、市川さんも、あゝいふ若い人たちが、自分から先きに立つてやつてゐるのですから、隨分頼もしいわね、つて頻りに喜んでゐましたつけが、元氣な人らしいから、尙さら惜しいわね』

大阪へ行つたB『然し、みなさんが云つてゐらしたぢやありませんか、井上さんはきつと今に、聯盟に歸つて來る人だつて！ 今日の會のことだつて、きつと泣いて思つてゐてくれるに違いないつて、永田さんも、涙ぐんで話してゐらつしやいました』

聞く人N『そんな人がどうして、そんなに思ひきりよくきつぱり離れて行つてしまつたのでせうか』

大阪へ行つたB『初め、上役の人の諒解を得て置かうと思つて行つたら、ろくろく聯盟の性質を聞きもしないで、頭から、『こんな仕事に參加することならぬ』と、どやしつけられたのですつて、それから、團体の力云々と云ふことが、いけないと云つて……井上さんは、大阪市立の職業紹介所の婦人部の主任をしてゐらつしやる方ださうで、公立の、市が立てた職業紹介所の吏員が、團結の力などいふ聞こえのよくない文字を綱領としてゐる聯盟に關係することは、絕對に相ならぬと云つて、どうしても聯盟の仕事から手を切ることがいやなら、今すぐ市吏員を辭めよとまで高壓的に出たのですつてね』

聞く人M『そんなところに戀々としてゐなくたつて、女一人食つてゆく位の仕事は、どこにだつてある

でせうに』
大阪へ行つたB『そこが井上さんなのですわ。今こゝで市の面目を丸つぶしにして、さうですか、ぢや左様なら、で井上さんが出ておしまひになればそれまでですけれど、そんな事をすればいつ迄も、聯盟は、市ににらまれなければならないでせう。大阪に出來た聯盟が、大阪市から睨まれるつていふ事は實際損ですからね。まあ、その内に、聯盟の立場を市も理解して呉れるだらう。その間のクサビになつて、井上さんが當分大人しく雇はれてゐるお積りなのでせう』
聞く人N『で、井上さんは、全然聯盟から手を切つてしまつて？』
大阪へ行つたB『とにかく今のところはさうらしいの』
聞く人M『隨分變ね、ぢや、表むき關係を斷つたところで、會員を殖すとか、相談にのるとか、いくらでも聯盟のために働けるでせうに』
大阪へ行つたB『そんなにしたら馘られてしまひます』
聞く人M『お役所なんて、そんな處まで、詮索しないでせう』
大阪へ行つたB『だつて知れゝば』
聞く人M『知れゝば知れたときのことにして。とにかく、今、聯盟の出來たての大事な時でせう。一日でも半日でも長く、さういふ元氣な人を加えておきたいわね』
聞く人N『私なんかなら、そんな關係になつたところに祿を食んでゐるのはいやだなあ』
聞く人M『一層、聯盟の仕事に執着して來さうに思はれますね』
大阪へ行つたB『そんなこと云つたつて、實際は、理屈通りにはやりにくいのでせう』
大阪へ行つたA『たゞ、市役所の例にならつて、雇主の方でも、余計强がりに出て、市のやうに、そんなら出てゆけ、がしにする者が多くなるとしたら問題ね。そんなら辭めますつて、云つて井上さんが出てしまつて、大いに職業婦人の意氣をそゝつて、一層聯盟に熱心になつた人が多くなつたかも知れないのですから……』
聞く人N『井上さんたるもの、隨分重大な地點を歩いてゐるわけですね』
聞く人M『で、聯盟ではこれからどう進むのでせう』
大阪へ行つたB『さしあたり、貸家でも一軒みつけて、寄宿舍を拵へて、事務所をそこにあてゝ働きにかゝりたいといふのでした』
大阪へ行つたA『女子青年會の淺井さんは、とにかく早く會員を殖すことだ、と繰返し繰返し云つてゐ

らつしやいましたね』

聞く人N『それあ、會員を余計にしなくつちや、仕事だつて出來やしませんね』

聞く人M『そして現在會員はいくら位と？』

大阪へ行つたB『未だ積極的募集にかゝらないのだけれど、百人位、申込をうけてゐるといふことでした』

聞く人M『百人？ でも隨分有望ね、百人が一人づゝ殖やしても二百人、三人や五人の會員を作ることは何でもないことでせう』

大阪へ行つたA『うちの「婦人運動」を准機關雜誌にして、成べく多くの人に賣り擴めるといふことになつて、さしあたり、三月號を百部だけ屆けることになつてゐます。賣りあげ金を、聯盟の運動資金の一部にあてゝ頂くことにして來ました。大阪方面で、廣告をとつて下さつたら、それも聯盟の用に立てゝ……………』

聞く人N『で、機關雜誌は全然ないのでせうか』

大阪へ行つたA『いや、二三ケ月に一度位づゝ、リーフレットを出していろんな報告をかねて、親睦をはかることにするつて云つてゐられました』

聞く人N『その必要はありますわねえ』

大阪へ行つたA『ところで、大阪のことにばかり感心してゐないで、お足もとの東京のことはどう？』

聞く人NとM『ほんとうにねえ。』

大阪へ行つたB『私、つくづく思ひましたわ、東京の方も早く、もつとしつかり地盤を固めなくつちやいけないつて、大阪の方たちに較べて、ほんとに賴りないやうですわ』

大阪へ行つたA『でも、私ちつとも急ぐことはないと思ひますよ。外からガヤガヤ云つて作つてみたところで、中堅に立つほんとにしつかりした職業婦人が、少くも五人や八人は揃た上でなくてはねえ。』

聞く人N『どうせ犧牲を覺悟でねえ』

大阪へ行つたA『殊に、大阪はまるで初めてのことだけれど、東京は、先に、婦人事務員協會が潰れた經驗をもつてゐるのですからね、何しろやりにくいわ』

聞く人M『タイピスト協會だつて、あんまり用心をしすぎて、反つて手も足も出なくて大きくなれないやうぢやないですか』

大阪へ行つたA『睨まれないやうないやうつて用心してゐては、やつぱり大きくなれないと思ひますがねえ、結局、どうせ睨まれるにき

まつてゐる仕事ですもの。勿論、睨まれる、つて云ふのは、こつちが悪いのではなくて、雇主側とか、お上、とかゞ、在來の因襲的な女性觀で、たゞ、安くこき使はうとしてゐるのに對して、眼ざめて來る事は面倒臭いことですものね、何と云つても、使ひにくゝなりますから。何も危險なことを要求するのでは決してない。たゞ人並みの、人間らしい扱ひをして貰ひさへすればいゝんだけれど。

それに、實際、このまゝでゆけば、女性の破滅ですもの、もつと、職業婦人の地位がよくならなければ。そして、もつと、女としての心やりをして貰はなくては』

聞く人M『同感々々、實際、私たちの仕事は、危險どころか、お賴みしてでもして貰はねばならぬほど大事な問題を含んでゐるのですわ。危險視したり、排斥したりするのは、感情から來るのですよそんなものに遠慮氣兼をしてゐたんぢや、いつまで經つてもラチがあきません』

大阪へ行つたA『それといふのも、未だ職業婦人の問題が世に徹底してゐないからだと思ひますわ。職業婦人社の仕事はそこですよ』

聞く人N『ほんとうにね、もう少し、時間と、金子の餘裕を與へられて、うんと社會的に宣傳をしたいわねえ』

大阪へ行つたA『時間、つていつたところで、時間だつて、或る程度まで、金子で買へるものよ。金子さへあれば、……』

大阪へ行つたB『大阪の會のときも、うんと宣傳をする筈で、ある商店から金子が出ることになつて、印刷物の校正が出るところまで進んでゐたのださうですけれど、職業婦人聯盟なんて、將來どんな危險なものになるか解らないやうな會に援助するのは見合はせやう、と云ふことになつて、急におぢやんにされたのですつて』

聞く人M『まあ、よく大人しく引込んで來たわね』

大阪へ行つたA『とにかく、まだ社會が、職業婦人問題に就いて全く理解をもつてゐないのですから、やりにくいわねえ』

聞く人M『社會が無理解から變な眼でみることもあるけれど、女がさういふ無理解な社會の眼を重大に考へすぎるといふことも云へますね』

大阪へ行つたB『それは、奥さんも大阪の會のときお話しなさいました。思ひすぎて、心の中で敵を誇大視することがないかつて。當事

者が考へてゐるほど、世間はそんなに執心して一つのことをみてゐるものではない、結局大勢に押し流されて、平氣になつてしまふものだから、要は、ぐんぐん信ずるところに向つて押してゆくのがいいのだつてね。』

大阪へ行つたA『そんな事を云つたかどうかは忘れてしまつたけれど、大阪のXYさんから來た原稿にもそんなことが書いてありましたね、……奥さんが、その講演の末尾に、「かうした聯盟の純眞な運動者や關係者の内に、やゝもすれば壓迫だの、支障だの、非難だのと云ふやうな幻影を、自分で作りたがる傾向があるもので、これはもつとも避けなければならない」と云ふやうな意味のことを附加へたときに、筆者は思はず心中にヒヤヒヤの快哉を叫ばずにはゐられなかつた云々………と。

(お斷り、XYさんの寄稿して下さつたものは、當事者同志で讀めば反つて參考になる點も多くていゝのですが、對外的なこの運動の折角芽生へたものを保護するために、掲載しないでおかう、とこの席で決まりました。謹んで、筆者の御諒察を願ひます。)

婦人參政權運動なども、初めはトテツもないお轉婆のする事位にしか考へられてゐなかつたのですが、今ぢやねえ、そんなこと、あたり前のことになりましたもの。』

聞く人N『大阪の方たちも、いろいろ職業婦人問題に就いて、しじゆう、社會の理解をえるやうに努力なさるといゝわね、口で、活字で……』

聞く人M『その點、東京の方がやり易いかもしれませんね。とにかく、學者、思想家の共鳴者や研究家が肩を入れてゐて下さるからね。』

大阪へ行つたA『東京の、やりにくい處もそこだけれど、すぐ議論倒れにされてしまふおそれがあるから、何と云つたつて、實際の仕事は、理屈だけで押してゆけないのですもの』

聞く人N『そして、大阪の方たちが支部を東京にも作るつてわけなのでせうか』

大阪へ行つたA『さういふ豫定もあつたらしいけれど、私、かう云つておきました。職業婦人聯盟の仕事などは、支部としてあちこちに作るのではなくて、あちこちで、その土地土地の職業婦人に聯盟を作るやうにといふことを、檄を飛ばしたり、手紙を出したり、聯絡をとつたりして行つて、各地に出

來上つたものの總聯合を作ると云つた風にした方がいい、と。又さうでないと、事實上やつてゆけさうにないわね』

聞く人N『少くとも東京の事情はそれに近いらしい……』

聞く人M『ぢやあ、さしづめ東京では、どの邊から動いてゆくでせう』

聞く人N『さあ……』

聞く人M『何だか暗中模索ね』

大阪へ行つたA『然し、全然芽生がないといふわけでもないわね。むしろ、あちにもこちにも、ころころしてゐて』

聞く人M『全く東京の現狀は群雄割據ね、いろんな、似よりの會があるので、あちにもこちにも、働けさうな職業婦人が散らばつてゐて、お互ひ同志はそれを知りもしないでゐるのですわ』

大阪へ行つたB『そういふ人たちの聯絡機關としての使命をも『婦人運動』は持つてゐる筈でせう』

聞く人M『私ね、丸の內邊のまん中に立つて、みなさん!! 聯絡をとつてやりませう!つて、叫び出したいやうなことがあつてよ』

聞く人N『ところで、オーイエス、といつて驅けつけて吳れる人がどれ位あるかしら』

聞く人M『ほんとに、丸の內邊にはそんなことには全然おかまひなし、と云つた風な、ジヤラジヤラした職業婦人が隨分多いわ』

大阪へ行つたA『然し、さういふ職業婦人は、どうせ目に立つ風をしてゐるから澤山居るやうに見えるけれど、案外、地味な、健實な職業婦人も、多いものよ、とにかく、職業婦人問題、と云へば、自分たちの問題としてちよつと聞耳を立てる位の用意は、大体の人に出來てゐる、と私は考へますね。それが、どんな問題を含んでゐるか、といふことには未だ理解がないとしても』

聞く人N『でも、保險會社や銀行などへ行つて細かいのがうぢやうぢやしてゐるのを見ると心細くなりますね』

聞く人M『そんなのは、讀み物と云つても、少女畫報とか令女界とかを讀んでゐる子供たちばかりでせう。大阪の聯盟だつて、中堅に立つてゐるのは、みんな二十四五以上の、しつかりした、經驗をつんだらしい人ばかりですよ。そしてでなければ仕事なんか出來ませんわ』

大阪へ行つたB『然し、さういふ子供たちを反つて歡迎して用はうとする會社や商店なども問題ですわね』

——終り——

×

『我が國の職業婦人には、妙に色つぽくつて、そんな商賣ではない生娘の職業婦人でも、いかにも媚を賣つてゐるらしいのが隨分多いやうですが、あちこちではさういふのはありませんね。

みんなきびきびとしてゐてよく働きます。氣持よく、そこは、いかにも、自分たちは職業婦人だ！と云つた調子で、實にその職務に忠實に働いてゐます……

『その代り終業のベルが鳴れば、又、實にさつぱりしたもので、たとえお客が



經過報告をかねて

大阪職業婦人聯盟　永田清美

時勢の奔流は何ものをも押し流さずにはおかないと謂ふ意氣込みでやつてまゐりました。

婦人は從來限られた狹い臺所を、たゞ一つの許された自分の天地としてまゐりましたが、時勢の大きな刺戟は、餘儀なく皆を廣い社會に飛出させました。

さうした人々は、自分の周圍に絡む舊い傳統の絆を斷ち切る事に懸命の努力を拂ひ、或は非人間的な不合理を破壞します爲に、尊い苦闘の歴史を私共に與へて下さいました。時として、其處には女としての缺陷を見出され、人としての弱さをも發揮された事とは思ひますが、お蔭樣で私共は、破壞期を送りて稍々建設の機運を迎へてゐるやうでございます。

一面机上の論戰は終りを告げ愈々實行の戰線に奮ひ立たねばならない秋ではないか、とも考へます。然しまだ、徹底的破壞を躊躇されてゐます現在は半燒の後普請といふ一番難關に遭遇して立つてゐるやうにも思はれます。

お互の要求が過去の寄生蟲生活から、唯單に婦人としてゞなく、人間としての本性に迄醒めやうとする事が、日一日と社會化し、一般化してまゐりま

未だ愚圖々々買物をしてゐやうとも、さつさと歸り支度にかゝるのです』

ときさき頃歐米視察をへて歸朝せられた大阪朝日新聞社の恩田和子さんは、職業婦人聯盟の懇談會の席上で、述懐談をなさいました。

×

『あるとき日本の本店から、上役の人がむかふへ行つたとき、支店に働いてゐる皆を招待して、ある土曜日の夕方に晩餐會をしやうとしたところが、彼方では何しろ土曜日の晩といへば一週間の勤勞のあとの樂しい遊び日で、集つて來なかつたさうです。――そして何故來ないのか、と問へば、ボーイや小使に至るまで、今度の土曜日の晩には、何某さんとどこそこへ行く約束がある。つていつた風に、日本でなら、ちよつと斷りにくいやうな上役の案内であるにも拘らず、そのために自分の豫定を變更するといふことを決してしない』のださうです。心にもなくずるずると引ずられて行く場合の多い日本の職業婦人諸子に、よつく聞い

した今日は、男子の方と同じ地平線上を歩み、働き、生きやうとする信念と意志が強く確くなつて來ました事は否まれない事實でございます。さうした心的傾向によります婦人運動も、過去に於いてなされた一部有閑階級の方々の運動とは、根本におきまして全然立脚點を異にして居ります。

萠え上らんとする道端の草を、生えさすまいとして人間がこれを摘みとり刈り取り、終ひには蹂つて置きましても、春が來ますれば何時の間にか伸び、花も開きますれば實も結びますやうに、内部から、生れんとして突上げて來ます大きな生命の力に對しましては、何人が是れを必死になつて押へつけますとも結局時の力、自然の意志には到底打勝つ事は出來ないと信じます。

より大きな力は、より大衆の意志と、要求を代表するものであります事は申上げます迄もありませんが、その意味に於きまして、斯うしたもの、要求の聲は、街頭到る所に滿ち滿ち、眞に、石叫ぶべしとまで迫つてゐるやうでございます。

さうした要求の渦巻く中に立つものとしまして、どうして是れを看過す事が出來ませう。

×　×

日頃から職業婦人の爲に平和な生活を捨てゝ熱心な研究をしてゐられます井上さんと、自覺による婦人が社會に働く傾向を欣ばれる反面、數の激增の外に何等の向上を内外に見出す事の出來ないことの遺憾さを痛感された婦人ホームの谷口さんとは、昨年九月、潜越でございますが永らく色んな職業婦人の方の立端に立つて見て、訴へどころのない苦しみを味つて共に泣き、幸福な地位を

ておいてほしい程度ではありませんか。

×

大丸呉服店では、今度の職業婦人聯盟に余程好意をよせていろいろ便宜をはかつてゐるさうですが、それといふのも、同店の女子從業員の取締をしてゐられる方がよく行屆いたその働き振りを認められてゐるからで、その方の人格を通しての聯盟の信用が厚いからださうです。

聯盟の仕事をするほどの人は、自分に與へられた職務に對しては指一本さゝれないやうに立派にやりとげませう。よく働いて而して要求すべきものを堂々と要求する、この心掛を私たちは忘れますまい、と、或る日、あるところでみんなで誓ひあつたことでした。

いかにもあたりまへのことであるのですが、このあたり前のことが中々行はれかねるのが、かうした運動に携はるものゝ陷り易い弊なのです。心得たいことであります。

×

まづ永田清美さんの大兵に、淺井治子

利用して、餘りに利己延長を計らんとされる冷酷な方を見て嘆き、又は今も繰返されてゐる女性の同士討ちを一人で悲しむでゐるこの私に、愈々職業婦人のためお互ひのために具体的運動を始められる決心をお話下さいました。

それから三人で、それでは同じ立端で献身的御指導をしてゐられる女子青年會の淺井さん高島さんにも――常から一滴の水、一塊の土、彼自身には何程の力もないが、集るところに大河の奔流を見、高山の聳えをも眺める事の出來る眞理を、換言したしますれば如何なる善意志によりて生れる價値も、團結の力を外にしては何程の働きをもなさない事を、痛切にお說きになつてゐられるのであるから、是非共此運動のための御奔走をお願ひしなければといふので出掛けて行きますと、お二方には一も二もなく、御承諾下さつたので、それから毎晩女子青年會に集りましたり、婦人ホームに寄りましたりして、ヤツト規約綱領の眞似事を作り、それを持ちまして、兼ねてから斯うした事に御理解のある大每の村島歸之樣や協調會の荒木義夫樣を度々お訪ねしては御懇切なお教へを受け、又は府社會課の牧野虎次樣や關大の岩崎卯一先生にも熱心な、お批評をいたゞき、其他あちら、こちらの先生方へ御迷惑をかけ、漸く大會迄の假綱領、規約を作りました。

斯くしまして、舊臘六日四貫島のセツルメントで欣んで感激に燃え乍ら職業婦人聯盟は誕生しました。其の當時から、團体的には產婆同志會の方や邦文タイピスト養成所の竹內さんの贊助を得、本年に入りましてからも大丸、高島屋關西タイピスト協會、府看護婦組合長の方々からも熱誠な御贊助なお言葉を頂き、豫期以上の好成績と期待を持たれ、前途は益々囑望の光榮を擔ひました。

さん、山口靜子さんの、コンパスの長いの、大阪の職業婦人聯盟の中堅はみるからに充分働けさうな頼もしい人たちですあなた方のからだ付きを見ただけで、大概の人は、この人たちなら、大丈夫やれるだろう、と信頼するでせうと、東京から行つた奥も宮本も、今更らに自分の風彩を省みられるやうな氣持で、つくづくと相手を見あげ見おろして感嘆したことでした。

×

もう一つ嬉しいことには、その他の谷口益枝さん、小松たま子さん、安中ふく子さん、山口靜子さん（あんまり澤山の方に一どきに會つたので、ちよつと思ひ出せないけれども）みんないかにも生（キ）で、いはゆる婦人運動摺れのしてゐないことです。

ちよつとみて、成程仕事が出來さうだと思はせるしつかり者の婦人運動家はちよいちよいあるものですが、さういふ人たちに相對するとき、私たちの心は何となしに不安で、淋しく暗くなりたがるも

準備委員として特に懸命の御奔走をせられました山口靜子、小松たま、池内きく、眞折靜枝、安中ふく、長野あい子、川口くみ子、岩本千代子、さん方により、大會の運びが調ひ、又遠く東京内務省社會局の杉本文さんの熱心な御活躍により東西の聯絡に一方ならぬ便を與へられ、奥むめお先生からは相携へて等といふ眞に力强いお言葉に一同は歡喜と感謝に滿たされ何の支障もなく、感激の溢れる大會を開き得ました。

其間最も殘念な事は、生みの苦しみの親であつた井上さんがお務めの關係で脫退されました事です。生れて見ますれば何んでもないやうなものですが、陣痛の如何に大きいかは斯うした運動に御經驗のお有りの方はよく御理解下さる事と思ひますが、どの方も人一倍お忙しい方ばかりでありましたゞけ、夜から夜への此の運動はまるで、泥棒みたいですね等と笑つた事もありましたが、實に血の泌むやうな苦しみを經てまゐりました。まして京都から通はれる井上さんは、毎晩お宅に歸へられるのは十二時過ぎになり、時にはホームに宿つていたゞいて徹夜して相談しました事も、三度や五度ではありませんでした。大阪の私ですら睡眠不足と疲勞で今日は倒れるか、明日は起きられるかと心配しながら、雨降りの夜更けの泥るみの道を二人で步き乍ら勵まし合つた涙含ましい悲壯な感激を思ひ出します時、此の度の脫退は實に斷腸の思ひがしました。

斯うした苦熱の中から生れた聯盟も、或一部の方々には忘れかけた、社交ダンス的遊戲運動をするのではないだらうか。さもなければ、現代思想かぶれのお轉婆が、柄にもない挑戰運動を起したのではないだらうか等といふ、皮相な見解をされる方々を見ます時、形容の出來ない齒痒さと、苦笑にも似た氣持を

のです

いはゆる婦人運動摺れのした人たちを見るとき（おゝ、職業的婦人運動家よ！）私たちはもつと素で、しみじみした生活に、にじみ出るやうな人間味のある女の姿をみたいと思はないではいられないのです。

何にしても、全くの處女地に芽生へた今度の職業婦人聯盟の仕事の上に、大きな希待をつないで見守つてゆきませう。

×

大阪の聯盟でも、さしあたりの必要に迫られて、はや、會員同志間で就職口の世話をやつてゐるが、これは當然のことであらう。組織がしつかりして來るのと共に、共濟の實をもだんだんよくあげてゆくのでなくては、かうゆう團体の存在の意味の大半はなくなつてしまふ。

むろ咲きの花の寄り集りとは、全然その性質を異にしてゐるのであるから、喜びにつけ、悲しみにつけ、お互ひに力となり、慰さめとなり、感謝ともなるやうに、お互ひ同志の心添が肝要である。

有たづにゐられません。

然しさうした無理解な疑雲は今後の聯盟の步みを以て拂ひのける覺悟です。日本一の大都會であり、商工業の中心と自ら誇る大阪に、日々最も多くの職業婦人を働らかせつゝあるこの地に、今尚向上的修養機關の一つもなければ、保護施設一つ見出されない事は、如何に平凡な常識に訴へて見ましても、これを當然として肯定する事は出來ないやうに思はれます。

然し此の秋、私達は與へられなかつた不平を外に鳴らす先きに、靜かに內省の鐘を撞くべきではないでせうか。餘りに慾惡的お膳立を自ら好んで、偷安的生活に耽溺した過去に對して、自然は、何事かを强く大きく叫んではゐないでせうか。其處に暫く雜音を避け、沈默の彼方へ耳を傾ける必要はないでせうか。

× ×

婦人の能力が男子の方より劣つてゐるといふことは、先天的に惠まれてゐないのではなく、自らもないものと誤信し、社會も又ないものと誤解し、これを開拓せないで放棄したところにあつた事は自明の理ですが、歐洲戰爭當時婦人方が、男子に代つてあらゆる職務を立派にやつてのけられた事によつても明らかに鮮明に立證されて居ります。それではといつて、すぐその能率を現在我國の婦人方に要求されましても、期待に添ふ事が出來るか否かは疑問ですが、願はくば、伸びる機會と伸びずにゐられないものとを與へていたゞきたいと思ひます。然し其間、眞平御免の戰爭を御願ひしてゐない事は、重ねて辨明して置きます。

美が婦人の生命であり人間生活最高の目的であります眞理を否むのではあり

ませんが、職業婦人は社會から往々にして、眞面目を缺いた虛榮心から、或は其爲に自ら眞珠を捨てゝ顧みないと云ふ、耳にするもいまわしい風評を以て葬られやうとします。其源をたづねます時、餘りにも馬鹿らしい外觀美に捉はれ過ぎたといふ浮薄な少數の人々のためにといふ事實を探り當てました時、これこそ『一人によつてなされた害惡が萬人の迷惑』になつた事を痛嘆せずにゐられません。

お互ひは最も各自を愼み、小さな感情を捨て、お互ひの幸福と向上の爲に凡てを相許し、相抱き合ひ、ギリシヤの立法者ソロンの言葉にある如く、『一人に加へられたる害惡は萬人の憂慮』と云ふ心境に迄達し、お互ひの爲社會の爲、やがては來る第二の母の爲、力の限りの苦闘を、私自らも期し又皆様へも切望して止まないのでございます。

×

それにしても、職業婦人クラブと云つた風の、職業婦人のための娯樂機關、讀書室等をそなえた一つの建物がぜひ作られればならぬ。

一日の勤勞につかれた職業婦人が一時間なり、二時間なりを、喜んでこゝであそんで家に歸るといふことになつたら、それはどんなに大きい喜びであることだらう。

本誌創刊當時から心にかけてゐた職業婦人クラブの必要を、近頃一層切實に考へられて來てゐる。

雇主がのぞむ少女たちの資格

賃銀が安い、反抗しない、感じもよろしい、と言ふ要件に應じて、職業婦人の群は官廳に會社に年々多くなる。今年も學校卒業期を前にして、求人求職の運動は盛んである。

先づ三越では補充と增加で本年は百人を募集し、その紹介方を府立職業紹介所に依頼しその他日本銀行、勸業銀行、東京鐵道局、遞信省等それぞれ近く募集の計畫をしてゐる。

採用する側ではどんな少女を一番望むであらうか、一般的には手先の器用が主とされてゐるが、三越等ではお客様に應對するので、一、尋常小學卒業者たる事（成るべく今年）二、身體の丈夫な事、三、顔立ちの惡くない事、四、眼鏡をかけてゐない事五、學力は多少劣る共品行方正なる事、等を採用の條件として、メンタルテストも行ふが、常識試驗の中には『飛行機と急行列車と光線とつばめの中で一番速いものは何ですか』等といふのがある。松屋、松坂屋でも何れも百人づゝを府立紹介所に紹介を依頼して來てゐるが、條件はやはり三越と大同小異である。市役所には電氣局と合せて現在五百人位ゐるがこれは別に募集廣告はしない、日本銀行では紙幣を數へる爲に可なり女事務員及補助員が使はれて現在六百人位ゐるが、今年も三月末には採用試驗をするさうだ。貯金局には現在千六百人位ゐるがこれは年中募集してゐる。年齢は十四才位からだが東京市内の職業婦人の平均を見ると十七才から廿一才までが一番多い大部分は日給で月收廿四五圓を振出しに上つてゆくのである。

女の集り

くさのとり

何々會、何々會、女の會合も隨分多くなつたもので御座います。ある時、ある娘は申しました。

『お母さん、わたし今日の同窓會には出席しないことよ。なぜ?て、だつてあんな古くさい着物しかないぢやありませんか。』

又ある時、ある妻は夫の顏をうらめしげにながめ乍ら申しました。

『ネあなた、今度の會には是非出席してほしいつていはれるんだけれど。ネ、あなた、あの……』

キラビヤカナ其の集りを見る度に、私はいつもかういふ光景をゑがき出さずにはゐられなくなります。目覺めて來たとはいへ、多くの女達は、ほこらしげに着かざつてゐる富める人達の其の服裝を、女特有の感覺をもつて、ながめまはさずにはおかないものでございます。

併し、今にかういふ會場の光景も、女達の心の置き所も一變するであらうと信じてゐます。

幼稚園のエライ保姆さん達の會合のある日、正三時といふ時間におくれない樣にと、五分前に其の會場にかけつけた新米の主席保姆さん、

『おやマア、お早く、……サアこちらへ、どうぞ』

お世辭タツプリにみちびかれた大廣間で、ポツネンとまつこと一時間半。やつとそろつて本日の議事にと議長格の園長さんが口を開かれたのが、五時に近かつたのに驚くよりも憤りを含んだ新米さんの顏のいかつさ!

『あなたの御園は結構でございますネ。私の方なんかもう……』

話は右に左に、前に後に、ゆられゆられて本題までの道のさても遠いことよ！

此の集り、實は他人の會費で夕食を共にするのが目的と知つてにげ出した新米さん。

明くる日、新米さんは昨日の猫の樣なおとなしさにひきかへて大氣焔をあげてゐました。

『仰々しい問題をひつさげて集り乍らあの態は？

あゝしていろいろの會の會費といふものは失はれて行くのだ。飲んだり食つたりしたければ、自分の金でするがよい。そうでなければ、みんなにもふるまつてやるがよい。

第一、あのお世辭のもちより會の樣なその話具合が氣に食はぬ。しかも作つた上品さの底に流れる木地のみにくさは？

神樣は、富めるものゝ世界にも、貧しいものゝ世界にも、共に變りのない愛をもつてゐて下さる。併し人間は、此の兩者の間に甚しい懸隔を置いてしまつた。

神聖な教育愛は、此の兩者の存在をみとめないはづだ。もしみとめるならば、其の愛は貧しきもの、いためるもの、惱めるもの、しひたげられるものに向つて一層つよくなければならぬはづだ。

だのに、教育界の空氣はその正反對をあらはしてゐる。富有區の先生なるが故に優良であり、場末のまづしい區に働く先生なるが故に劣等であるとの、淺はかな考へが、髓の髓までしみこんでゐる一般の先生の頭を、一つ一つはりたふしてやりたい。自分自身の勤め先を輕くみて、何かの機會さへあれば、都會へ、中央部へと色めがねをつかつてゐる先生は尙更のこと。

先生の心の墮落は、大都會にいく程はなはだしい。いれものばかりが美しくつて中味がからつぽ、それが現在の教育者の多くではないだらうか。』

あれもこれも新米さんにはシヤクの種でした。馳け

て來れば數へ切れない程の不滿がございました。併し考へてみれば此の新米さんには生活の不安がない。少くとも自己の天職だと信じて働いてゐるが故に、勝手な熱も吹けるといふもの。

おゝ生活！

みんな生活のために喘いでゐるのですもの、無理のない事かもわからない。

『併し、と私はいひ度くなります。』新米さんは又眉を上げました。

同窓四人の話

◆（海軍大佐の妻）

『□さん、あなたはどう思ふ？　子供の敎はつてゐる先生へのつけとゞけはしてもいゝものかわるいものか。』

□（法學士の妻）

『考へるまでもなく………』

○（小學校長の妻）

『エヽ何ですつて先生へ？　そりや、おしやした方がよろしいわ。うちへもみな先生方が見えますわ。』

『無自覺な先生と、盲目の母とはもらつたりやつたりして、すべては終れりとしてゐます。私はそんな必要はないと信じてゐます。眞の信頼は、物質によつて表はさない、ある偉いものをみせてくれますよ。』

『私もそう思つてるのよ。だから子供の學校へは何度も參觀には行くけれど、先生の所へ物をもつていつたことはないのよ。』

△（辯護士の妻）

『そんなむづかしい議論はやめなはれ。そやけど何やナ、先生いふたらみんなえらそうにしてはるけど感心する樣なの一人もないやないか。』

◆『ダメダメ。私なんか内幕がわかつてゐるだけに、すつかりアイソをつかしてゐるのよ。校長だなんていつても一種の外交屋なんですよ。頭を低くして己をすてゝ有力者にぺコぺコするのが出世の早みちだと心得てゐるのだもの。』

△『コレコレ失敬な事いひなはんな、○さんがゐてやないか。』

○『アンタサン、ナンデスセ、校長になりますと、おつき合する範圍がひらうもなりちがひもしますよつて、中々忙しいんでんの。ウチは區内でも評判がよろしおして…………』

△　□　◆顏見合せてクスリ。

□『ネ、◆さん、あなたなんか隨分讀みもし考へもしてらつしやるが、私達女つて、ほんとうに力の足りないといふことを痛感しはしなくつて？』

◆『うれしいわネ。あなたの樣なブルジョア階級の奥さんがそう考へ出して吳れるのは。西洋の人はとにかく、日本の女はだめネ。もつともつと己をつくり上げて行かねばならないわ。形式的な忠君愛國なんかいつてゐる中に、日本の國はダンダン亡びて行くつていふことに、氣がつかないのかしら。女が覺めなけやア、子供が立派になる道理はないわネ。よい子供を生んでよく育てるのは、女の實力一つにあることなんだわ、もつともつと私共は自分を作らなければいけないと思ふわ。』

□『ほんとうにそうよ。夫對妻の問題にしても、こゝに十の個條をぬき出して、それについて對決してごらんなさい。外の人は知らない。ともかく私は、そのどの一つにも夫の前に頭を下げなければならぬ女なのよ。いくら情けないつていつても私はそんなにも出來てない女なのよ。』

◆『自分の足りないといふことすら知らない女が多いんですものネ。一番手輕なのは、とにかく家庭の女も、有益な講演會等には、ドシドシ出かけることですネ。』

『そんなこと出來まつかいな、うちの………』

◆『出來ないことがあるものですか。妻の良くなることをとめる夫つてあるものぢやないわ。もしそんな夫なら、それこそ隨分つまらない男だわ』

『そうよ、夫なんて敬ふだけの價はないぢやないの。妻のよくなることは夫をもよくすることぢやないの』

ム、つまらぬ顏！

下駄直し

大阪朝日新聞記者　北村兼子

くさだらけの頭を持つ十一二歳の小僧が、太い青洟を垂らしながら、緒繩で通した下駄を七八十ばかり背中に擔いで、抑揚のある一種の調子で、げたアなほ…

…語尾のしの音は街上の雜音にボカされてしまつて道のあなたへ消えて行く。私が小學校へ通つてゐたころ、このなはしと言ひ合せたように途中で出逢ふ。その度ごとに私はこの小僧の記憶力の强いのに感心させられてしまふ。

アレだけ澤山な下駄を預つて、よくそれぞれの持主の名前、注文、嗜好、工賃などを記憶してゐられたもの、なんて記憶のいゝ頭だらう。モシ私にこれだけの記憶力を持たせたなら、女學校の入學試驗に心配はいらないにと思つた。

それにしても彼の頭は、くさと禿と薄い毛とが大理石のような紋樣に錯綜ひて、その中に包まれてゐる腦漿が、どうして强い記憶力を持つか、また腦の惡い表徴として顏の面積に不似合なほど太い鼻下の二本棒を垂らしながらエキストラ、オーヂナリーな記憶力を持つこの小僧ほど不可解なものはない。

學校で先生が塙保己一の話をして下さつた時、强記なものに下駄直しがあるといふて笑はれた。

女學校へ入學してから通ひ路が違ふため、この小僧さんに出逢ふ機會がなくなつたが、或る日學校の家事科で下駄直しの教授があつた。

先生は教育家に通有な謹直な顔で、下駄の鼻緒をいぢりながら講義を始めた。事實を白狀すれば、炊事だとか洗濯だとかは二ケ月の下女奉公で事が足る。現在私どもは飢渇のように智識を要求してゐるので、そんな贅澤な餘暇は持たない。況んや下駄なほしに於てをやだ。こんなことが學校の課程の中へ入れるべきものだらうか。こんなことで勉學の時間を費して步調を揃へて衆愚を社會へ送り出す。だから女に賢いものがなくなると思ひながら、先生の言はれる通り、魂のない手を動かして、下駄なほしのマンナ！を覺へた。先生から、北村さんは手工が旨いと褒められた時、擽ぐつたい冷汗が流れた。

その次の國語科の時間で、女學校教育は何を目的としますかと言つて、先生は〃その次に來るべき『賢母良妻』といふ答を期待した。その時、私は起立して『馬鹿ものを』と對へて皆から笑聲を浴せかけられた。

家へ歸つてその話をすると、お父さんは『つまらない事を教へてもらうな、そんな時間は缺席して活動寫眞でも見に行け』といつた。その夕、家族づれで新淀川の堤防を散步した時、石に躓いたお父さんの下駄は鼻緒を切つた。こゝだと私は手際よく前鼻緒をたてゝあけると『女學校で教はつた事が役に立つたのは空前ぢや』とお父さんが感心して見てゐらつしやる。『では缺席も出來ませんね』と私は隙さず打ち込んで、又皆がたら笑はれた。

× ×

外國語學校へ通ふ事になつて、また每朝この小僧と途中で顏を合はすことになつた。この時はモハヤ小僧ではなく、大僧であつたから記憶力も体軀とともに發

達して、百以上の下駄を擔いで。げたなほ…………と優美な賣聲で道を流して行く。しかるに私の頭は彼れと反比例して、ダンダン記憶力の減退を感じ初めてゐた。それから、私が大學へ入つて法科で權利義務が頭を支配してゐる時、彼れは既に獨立開店――たゞし他人の軒下ではあつたが――兎も角、店主となつて又たその下に小僧を使つて、げたなほ……をやらせてゐた。世の中は順繰りに繰られて行くものである。

それから私が新聞記者となつて、社交界へうろ付くころ、記憶力の減退が急速度になつて、パーチーの開かれる日時を忘れたり、有名な貴婦人や令孃で、二度も三度もお眼にかゝつた人の名前を忘れ、途中で出逢つても知らぬ顏して通り過ぎるといふようなことが多く、私が何か高慢ぶつてゐるかのように嫌味をいふ人さへあつたが、私は何もそんな腹ではなく、記憶力の衰頽とそれに近視が手傳つて、こんな失態を演じるので、モシ私に下駄なほしだけの記憶術があれば、百や二百の知人なら、忘れることはあるまいにと情けなく思つた。もちろん、立派な社交界の女王を下足なみに冒瀆するわけでは決してないのである。

こう記憶がなくては重大な失態を演じるかも知れない、どうしたものか、下駄なほしにでもなつて人間をスゲかえねばならない。

× ×

今月放送局でラヂオの放送をたのまれて、こんなことをやつて見た。

科學は進歩した、金もうけと人殺の方面に驚くべき進歩を見せた。しかし人類の福祉を基調とする方面には一向に恩惠を與へぬ。それはなぜであるか、つまり女に科學者がないからである。

瓦斯の進歩が毒瓦斯となり、水壓の研究が潜航艇となり、光の研究が殺人光線とまで進んだ、斯様に立派な發明が喧嘩や人殺しの方面にばかり利用せられて、私ども日常の生活とは何等の交渉もない。

女學校の教育でも人文科學に重きを置いて、自然科學は等閑になつて、女性と發明とは切離されてゐる。今は下駄直しや炊事を教へるやうなノンキな時代ではない。

臺所には漬物といつて大根なんかを二ケ月も三ケ月も腐らせて不潔な上に大切な空地を塞いだり、米をかして御飯をたく、その手數のかゝること、食物でも掃除でも不經濟と不衞生とは昔そのまゝで、何等現代科學の恩惠に浴してゐない。

女性好學熱の勃興は誠に慶すべきことではあるが、みな人文の方面に浮足で走つてしまつてゐる。科學に心を潜めることは靜かな女性に適したものである。男性にばかり任して置けば折角の發明は喧嘩に使用せられて野蕃時代に逆轉する。

こんなことをいゝ氣になつて饒舌つて、歸る途で下駄なほしの軒先きを通つて、自動車から瞥見したら二三百の下駄を並べて、家業にいそしんでゐる彼れを見出した。

相變らず記憶の强いことであると感心して、その時フト思ひ出したことは、今放送した中へ大切な核心をなすべき一句を言ひもらせたことであつた。惜しいことをした。もうスグ直しも出來ない。アヽこの頭、記憶力の減退、下駄直ほしの憧憬。



埋草　むめお

私はちかごろ、分にすぎた事に手を擴げないやうにと自分を制してゐる。

私が時間の觀念がなくてずぼらだといふことは、近頃通り相場になつてゐるが、恥しいことである。然し考へてみるに、私は長い間あんまり身に過ぎたいろんな重荷を脊負ひすぎてゐたのだ。今のやうな社會に生きてゐては、したいと思ふことや、しなければならぬと考へられる事は實に々々に多い。あゝもしたい、斯うもしたい。私は始終自分で、自分の首を横に振つて云ひ聞かせながら、いやいや自分には身にすぎたことだ、當分手出しをしないこと、と押さへつけてゐる。その內誰か、し初めるだらう！そして、次々と自分の心にかゝつてゐた仕事が人々の手で初められる私にとつて大きな安堵であり、喜びである。

大阪の職業婦人聯盟、國際勞働協會の婦人部委員、婦人の成人講座婦人問題研究所、など、みなさうである。

□

そしてつくづく私は考へる。ほんとうに、私には、自分自身の時間といふものがまるで無いではないか、曲りなりにも、よくこれでいろんな仕事をやれて來たものだ、と。私ばかりではない、誰でも、世の多くの家庭婦人といふものは、まして幼い子供をもつ母親といふものは、——もつとも、人手を自由に使ひうるお金持の婦人は別——自分一人で自由に使ふ時間といふものを、持つことが出來たらそれは奇蹟であるであらう。今のやうな、家庭生活の樣式が惡いのだ、と叫んでみたところで、三人や五人や七人の者があげる悲鳴が、それをどうしやうもないことは云ふまでもない。

□

仕事が五つも六つもこんがらがつて來て、どうにも仕末がつかない程忙しさの絕頂に達したとき、私は放心狀態のやうになつて、一日か二日を、全ての心がかりを打ちやらかしておいて、子供たちと遊びくらしてしまふ事がある。

子供たちにとつて、この時ほど身になるときはないやうだ。目にみえてすくすくと伸びるやうに私に思はれる。かはいさうに、ほんに時たまにしか訪れて來ない極樂風ではあるが。

□

私はいつのまにか、ポケットマネーに不自由をせぬいはゆる婦人運動家たちと、次第に離れて來た！又、子を持たぬ、家庭を持たぬ自由な婦人たちと、自分の時間として一日中を使ひおけすることの出來る婦人たちとも、知らず知らずの內に遠ざかつて來た。

たとへ意識して今日の結果を招いたのではないとしても、これは當然のみちであつたのであらう。

□

たとへば職業婦人には、職業婦人同志で共通の問題があり、家庭婦人には、家庭婦人として共通の切實な問題がまた別にある、といつた風に、一口に婦人運動と云つても、その人たちの境遇なり、身分なり、職業なりのちがひでそれぞれに分れてゆくのは、當然のことであらう。



家居

小澤トヨ

一月元日

朝七時頃、いつもの通りに目が覺めた。一二町向ふの方で萬歳の鼓の音がする。硝子戸越に見る空は薄青かつた。『もう起きやうかまだ誰も起きないやうだが』私はそんなことを一人で考へながらまだ起き上ろうともしなかつた。『新しい年のくるのをどんなに待つて居たらうか、今日がその日だ』、とも思つてみた。

　そのうちに母が起きたらしく臺所の方で炊事の音が聞へて來た。

『暗さ、淋しさ、惱ましさ、いらいらしさ、さう云ふやうな氣持で塗られて來たのが私の半生だつた、今年は二十六だ、明るい心持で生きやう、もういゝかげんいゝ年が來てもよさそうなものだいや、ほんとうに來さうな氣がする』私はそんな事をも一度考へて漸く床を脫け出した。

『まだ午前十時だ』と私は思ひながら机の前に座つた。今日の予定は親しい人に手紙を書いたり、年始狀の返事を書いたりしてから後は本を讀んで暮さうと思つて居たのだつたところが暮のうちに出來上らなかつた自分のスヱーターが編みたくなつて、何よりも先にそれを取り出してしまつた。そしてお晝過ぎまで餘念なく編みつゞけた。

　夜は、この上もなく靜だつた。あたりがひつそりと寂しづまつてしまつたばかりではない、自分の心持もおちついてゐた。本が澤山よめたからだつた。『今年一ぱいかうして本を讀みつゞけて暮せるのではないか！』どうかさうであるやうにと思つた。

　久し振で尋ねて來た從弟が今晩は泊つて行くので、茶の間の方はまだ話聲がして居た。私は八時すぎに其處へ出かけていつて、菓子を食べたり磯豆をつまんだりして來た。

一月八日

午前十時頃家を出た、今日は大久保の婦風會へ御年始にいつてこやうとしてゐる。原町から巣鴨の驛まで二十分ばかりのところを歩いた、驛のホームに待つてゐると、駒込の方から來た電車がやがて着いた。電車の中は腰を下す席がまだ大分明いてゐた。日の這入る方の側に座つて向ふ側の人を見ると、羽織袴の禮裝だつた。次の驛で乘りこんで來た娘さんの木綿の縞の着物にも、新しい折目がついてゐた、『お正月なのだ』『新しい年が明けるのを皆なが待つてゐたのだ、』さう思つてみてゐると私の心にも輕い喜びが湧いて來た。

私は、この道を毎日通ふ慣しになつて居た。だが今日のやうにゆつくりとした氣持で電車の中に居たことはなかつた。いつも忘れてはならないことが二つも三つも胸にたまつてゐるやうだつた。そうでなければ、晝間は事務所に居て、夕方はどこそへへ廻ると云ふやうな予定を持つて居た。ところが今日は、そんなものは一つもない。窓から見える青い空を眺めた。目白邊りの森は枯れ色に靜かだつた。

婦風會の事務所では、久布白さん、守屋さん、ガンドレットさんに會つた。聯合婦人會の事務所、私が毎日通つて來た部屋にも這入つた。もう今は、私の働くところではないのだなと思つて壁を見廻した。去年の暮に片つけていつた荷物がそのまんま少し塵を被つてゐた。『さようなら私は新しい生活を初めました。』さう云つてみたかつた。

婦風會の事務をとつてゐる若い婦人達に私は挨拶をして廻つた。そして歸りがけに一袋の菓子を置いて來た。私がこの事務所に通つてゐた間時々此處の人達はお茶に私を呼んでくれた。一人別な所に房して居る私も『小澤さん！お茶が這入りましたよ、いらつしやい』と下から呼ばれるといつも二階を下りて來た。たつた一人で事務室にゐると、お茶に呼ばれることは時々のよい慰めであつた。私はその良い友達の心に少しでも報いたいと思つてゐた。

歸りは西大久保から若松町、山伏町まで眞直に東へ向つて歩いた。其處でイデア書院へ一寸寄つて家へ歸つて來た。疲れて居た。でも靜かな滿足な氣持であつた。

編物を少し爲た頃、日が暮れて來た。

一月十五日

私の窓の前の庭に少しばかりの木が植つてゐる、其下の土は柔かさうな色をしてゐる。寒い朝は一ぱいの霜柱だ。其柔かい土の上をそつと綠

をあてながら、私は今日も庭を掃く。

まだ暮の或日、私は一人の友にいつたことがある、『小さな草なんてものは、可なり寒さに堪えるものですね、』と、其時分、箒をあてながら土を見やると、一寸程の草が青々として、併し淋しさうに、たつた一本位生えて居るのをよく見たものだだが今朝あたりは其草もない。遂々堪え切れない迄の寒さになつてしまつたのだ。

一月十六日

午前十時頃猿廻しがくる。銭をやる。玄關の棚の上に小さい盆にのせてバラ銭が二三十錢この正月の始めには這入つて居た。今日みるとあとの残りはもう五錢程になつてゐた。晝飯を食べおへたと思ふ頃、またガラガラと格子の開くのが聞えた。其處には一人の物乞ひが腰をかゞめて居た。『私は、長野のものでございまして、これから國へ歸らうと思ふのでございますけれども、旅費も何にもございません』さう云ひながらまたも丁寧に頭を下げた。私は中ば無中で、まだ残つて居た銅貨をとつて彼の手の平へのせた。彼は慇懃に挨拶して引返して行つた。其姿は私の心を非常に悲しくさせた。それはどことなく父を想せるところがあつたから、私は不意に起つて來た悲しみをどうしやうもなかつた。

一月二十日

朝の九時半頃には魚屋の藤さんがやつてくる。十一時頃には酒屋の若い衆が『今日は』と慇懃な聲を出す母は其度に立つていつたり、ことはる時なら『今日はようござんした、どうも御苦勞様』と奥で大きな聲で云ふ。

今日は午后から米屋が袋を擔いで來た。裁縫をしかけて居た母は、出ていつてお米をあけたり帳面をつけたりして來た。

玄關の方へは朝鮮の人が飴を賣りに來た。それには私が出て一袋買つた。

私は愕いた。家庭と云ふ所は、朝晩の用事を片つけると後は、自分の自由に時間が使へると思つて居た。ところが何と、仕事の興味を中斷されることが多いだらう。本を讀んで居ると、電氣のメートルをみにくる新しい洋服の型を裁つたりして居ると、神社の月掛を取りにくる。興味を中斷されることの苦しさを家庭の主婦は如何ばかり味はゝされて居ることだらうかと愕いた。せめて、御用聞きだけでも排して、自ら一日に一ぺん位街に買ひ物に出た方がいゝのぢやないかと思つた。經濟上御用聞と掛買ひとを止めるのがいゝと云ふ說は生活改善などとなへる人達か

ら聞いたやうに思ふが、經濟の爲ばかりでなく、主婦が自巳の精神の靜かさのためにも止めた方がいゝと思ふ。それに、一つ一つ貨物をみるために店の前に立つことは、明け方の木の葉の飜を眺めたり、夕方の雲を眺めたりする程にも、なつかしみのあるものだ。

五六年の間、外に出る職業ばかりに從事して居て、この年の初めから家居して居るのだが、氣づくことが多い。

一月二十四日

A　私は其時得意だつたのよ。それでも。後になつてみてびつくりしたわねえ、つくづく自分を馬鹿だと思つたわ、いやにいやになつたわ自分が、

B　まあ、さうなの！

A　今年になつてからこれで三度目よ、自分はいやだなあ、と思つたことが。

B　ほんとにねえ、さう云ふことがあるものねえ。

私はこんな會話を書きつけてみて自ら慰めやうとして居る。

自分で自分を慰める外仕方がないやうなことに、生きてゐる間に、何度も出逢ふものらしい。

一月二十八日

東京聯合婦人會では、二月になると總會を開くとかで、忙しいと云ふことを聞く。未だ私の辭した後に專任の書記がないとかで、不便でもあると聞く。

一昨年の或夜、守屋さんが私に、『此處であなたが二十年辛捧したらとても偉いものになりますよ。』と云はれたことを思ひ出す。『偉いもの』と云ふのが有名な女になる、と云ふことだか、眞に外實ともなつたよい人間になり得ると云ふ意味だつたか、或はまたもつと別のことであつたかはつきりしないけれども、其時私は一人で事務所として貸して貰つて居る婦人ホームの應接室に居た。もう夜は宵を過ぎやうとして居た。畫間の仕事がまだ片つけきれないで机の上には紙や書類がちらばつてゐた。其處へ外出歸りのまゝ守屋さんが這入つて來なさると机のそばの籐椅子に腰をかけて、やがて其事を云ひなさつたのだ。半ば獨言のやうに其時分、聯合婦人會其物も、私の屬して居た勞働部も非常に多事だつた。

二十年の辛捧は愚か、たつた一ケ年半で出て來てしまつた。婦人運動の鳥瞰圖をみることの出來るやうな私の位置を棄てゝきてしまつた。偉くなれる運命を取り落して來た私かも知れない、多分そんなことであらう。

だが、今私に、一番なつかしく、

一番尊く、一番高く思はれることは、あらゆる點に於て洗練された生活と云ふことだ。それへの追求で一ばいになつて居る私は、二十年後の有名な婦人であるよりも幸福だと感じてゐる。

今日此頃、聯合婦人會の人々が忙しいと云ふことを折々聞いて、私は自分が其處に居た時のことを考ひ出してもみる。

過ぎていつたあらゆることは、今の『私』となつて生きて居る。

二月一日

きのふの朝出した手紙に對する返事が今日の夕方にはもう來た。絕交狀に對する絕交狀だ。こんな事は悲しむべきことの一つに違ひない。私はさう思つて、湯道具を取り出すと心を朗らかにするためにと思つて、湯に出かけた。浴槽は靜かに澄んで居て浴客は少なかつた。どう思ひ返して見てもいやな人はいやな人だ。美しからざるもの、眞實ならざるものからどんどんはなれてゆかう、と云ふ考へを今こゝで一つ實行したわけだが、私は其自分の行ひを反省してみて、どうしても後悔する氣にはなれない。

私は靜かに湯にひたつて考へた。『私はこれから尙々勇敢に、自分の憧れる方へ進んで行かう』結極それだつた。そして、今まで感じることも出來なかつた廣い明るい世界がすぐ目の前に開けて來たやうに思へた。

他人の惡に對しても、自分の惡に對しても已むを得ないことだ。と云ふやうな生ぬるい同情で過して來た不徹底な過去の考へを、今すつかり洗ひ落したいやうな氣持になつて居た。

砂山

內山よし路

籔かげの畑は乾けりその上を
飛べる蜻蛉のはね光り見ゆ。

×

晴れし午後ひとり砂丘にねそべり
てしみじみ仰ぐ故郷の空。

×

うすらぎし秋の日射や砂山に
指よりもるる砂の音聞く。

×

冬の夜に口かはければ起きいでゝ
水をふくめり齒にいたくしむ。

×

晝休み人目しのんで女工等の
裏庭で吹くハモニカあはれ。

×

人知れず谷間に咲いて散つたとて
月が見てます小さな花よ。

×

雪の朝道行く女の白カバン
赤いインクのしみ二つあり。

畫眉草

榎本八十子

日の照る
庭の一隅に
安堵の息をついた身は
そつと芽を出し
葉を出して
地上を飾へる畫眉草
花も少さく青白く
風のまにまに實をむすぶ
戀には偉い畫眉草よ
散亂！散亂！
實をこぼせ
日の照る
庭を一つぱいに

風

目次緋紗子

燒け爛れた太陽を
覆ひかくして
灰色の空はひくゝたれかゝり
うそぶく寒風は刄をふくんで
陰慘な街中をふきまくる
悲慘な生活に疲れた人々の
その雨戸をたゝき
遠慮なく、その節穴から、透間から
慘虐の刄を刺入れておびやかす

風よ、
粗末な肩掛にくるまつて
今宵かへる
ふるえてゐるこの小さな存在に
そうも痛くぶつかると云ふのか
路傍の草木も、皆枯死してしまつた
街上の木にも一葉の葉すら殘つては
ゐないこの寂しい街中だ
僅かに路上にしがみついてゐる土く
れまでも略奪して
今宵一夜
あの粗末な貧しい住居に
ひしめき聲をあげさせると云ふのか
何と慘忍な

婦人會近報

全國女子教育促進同盟成る

いまの我國では、男女の綜合大學が五校、單科大學が七校、文部省直轄の專門學校が七十四校あるのに、堂々と女子が入學出來るのは音樂學校だけで、あとは入れても、聽講生としてしか許されてゐない。そこで同盟は女子の高等教育を開放する方法として、女子のために各種の高等教育の學校を新設すること、現在の男子の學校に女子部を設けること、共學を行ふことを要求し、さしあたり財源がなくても實行出來さうな男女共學のために努力する。

そして、高等女學校の改善案としては、女子中等學校として、教授時間をふやし、選擇科目隨意科目を作つて、教科書をあらためて男子の中學校に劣らぬものにす可しと定めた。

主張するところは、

一、女子にも男子と同じく修學の權利がある

二、子孫を生む母を高め、腕力、智力、金力、權力の男子文明に、正義の維持者としての女性を參加させやう。

三、男子のよりよき半身たる妻たるために高等教育は、國家の体面からも必要である

と云ふにある。

勞働婦人協會の申し合

東京聯合婦人會の組織が變更されてから、これまでその一部であつた勞働部がこんど獨立した團体となつて、勞働婦人協會として、婦人勞働法制の理論と實際との研究、輿論の喚起のためにつくす。

その申し合せは、

一、勞働婦人相互の啓發向上を目的とする。

二、同人と會員とを以て會を組し同人は月一圓の會費を負擔して本會に對して無限の責任を負ふ、會員は、趣旨に賛同したもので、月額二十錢以上の會費を負擔する

三、本會の目的を達するために、婦人勞働問題の理論と實際の研究輿論の喚起をはかる、等。

（小石川原町十二ろ二號小澤方）

婦人問題研究所

婦人は長い間、男子とは別な特殊な境遇におかれて來た。從つてそこには、婦人だけの特殊な世界があり、特殊な現象があつた。それは過去に於てさうであつたばかりでなく、今日と雖も同樣であり、遠い將來に於て、環境が全然男子と同一になつたとしても、そこには性の相違から來る兩性問題が、何らかの形で殘るであらうと考へられる。

かういふ見地から數人の婦人が集つて、婦人に關する社會問題の過去並びに現在における事實を、兩性問題研究のために、正確に、詳細に調査するものである。

日本や外國における婦人問題に關する圖書や雜誌やパンフレットなどを蒐集すること、研究會や、研究所月報圖書の出版などをおひおひと初める筈である。

（東京西巢鴨宮仲二三一〇）

婦人及幼年勞働者の夜業禁止請願運動

請願文

改正工場法（大正十二年五月廿九日法律第三十三號）中の附則全文を削除し、並に同法中寄宿舍制度を監督す可き條文を追加制定し、則時實施せられ度理由書及參考資料相添此段請願候也

請願の理由

夜業禁止案は大正八年ワシントンに開催された第一回國際勞働會議に於いて採擇せられた條約案であつて、同會議には、政府代表鎌田榮吉氏、資本代表武藤山治氏も列席し、共に贊意を表して來たものである。

のち四年を經て、大正十二年、政府は右の條約案に基いて、夜業禁止を含む改正工場法の制定をなすに至つたが、其附則によれば同法は施行後尙三ケ年の實施猶豫を設けてゐたのである。

然るに右改正工場法は、制定後三年を經た今日、未だ施行令の發布を見ないのである。

我等夜業禁止を力說するの理由は、

第一　保健上より見たる夜業の弊害
第二　賃金及生活上より見たる夜業問題
第三　風紀德操と夜業禁止
第四　夜業の必然の結果としての寄宿制度の弊害
第五　國際信義と夜業禁止
第六　國家の產業政策より見たる夜業禁止

等である。

婦人及幼年勞働者の夜業を禁ぜよ

農商務省の發表せる某紡績工場の女工八十一人に就いて調査する處に依れば、夜業七日にして體重百七十匁の減少を來たし、晝業六日にして六十九匁を増加し、結局百匁は囘復せざるものとなつて居る。

此一例によつて見ても如何に夜業が幼少婦女子の身體を害ふかを知る事が出來る。而して此結果結核病消化器病不姙症其他の恐るべき疾病を來たすのである。

石原博士の算定に依れば、是がため一ヶ年間に女工千人につき廿三人の割合を以つて死亡するのである。即ち我國現在の婦人勞働者八十五萬七千人中より年々一萬九千五百五十人以上の死亡者を出して居る譯である。不姙症に至つては、某大工場醫師の推定によつて見るに千人に對して百人の割合を以つて侵されて居るのである。

尚又夜業中に於いて疲勞の爲注意力が衰へる結果多くの思はざる負傷をなさしめることは統計上歴然たる事實である。

男女工八千人を有する工場に於いて、廿三ヶ月間に負傷せる勞働者は、一千五百七十二を數へる（協調會調査）午前六時より午後五時に至る各時間中の百分比負傷を見るに、午後に入つて二、七より五、八に及んで最高率時間午後二時には一〇、三に及んで居るのである。大正十三年末に於ける、我國婦人工場勞働者は八十五萬七千九百三十人、其年齡は十五才以上二十才未滿最も多く、十二才以上十五才未滿の女工、十一萬五千八百一人を數へる（社會局調査）これ等の全部は、夜業の最も多き纖維工場に働き、殊に夜業の主たる紡績工場に於ける婦人勞働者は、十八萬四千百七十八人を示すのである。

されば、我國に於ける、夜業禁止問題は、實に重大なる母性保護の問題であり國民保健の問題である。かくの如き野蠻極まる夜業に依つて失はるゝ、かく多數の婦人勞働者の生命、並に其母性に對して、誰か冷然たる態度を取り得るものがあるか!!

更に又夜業は、いちじるしき勞働者の移動を來たすのである。それは寄宿舍制度或は健康上或は結婚後夜業に從ふことが出來なくなる結果である。或調査に依ると、全從業員に對して、一ヶ年間に於ける其移動人員が關東は約八割、關西約十割の多きを示して居る。かくの如く一ヶ年にして、全從業員が、全々新しく入り代る程の激しい移動は、熟練工を養

婦人及幼年勞働者の夜業を禁ぜよ

成し得ないこと丶なり、從つて精巧品を製造し得ない事となつて、我紡織工業の將來よりしても、決して觀過すべき問題ではないのであるが、一層我等の云はんとする處は、之がために勞働者の賃銀、竝に其生活が更に向上しないと云ふ一事である。

されば我等は、夜業を禁止する事によつてこの移動を防止し、熟練工を養成する事によつて精巧品製造に進み、勞働賃銀の低き事を以つて其基礎となせる我紡織工業を改造して、勞働賃銀の向上從つて生活の進歩を促すべき事を要求するのである。

前述せる如く、夜業には必然的に寄宿舍制度を伴ふのであるが、この寄宿舍制度は、たゞに婦人勞働者の風紀德操問題のみならず常識修養を阻害する點更に稍もすれば資本家側の人權蹂躙が行はれ易い事等幾多の弊害を認めるのである。固く門を閉し、外部とのあらゆる關聯を絶つを以つて能事と心得て居る監獄的寄宿舍の中に於いては、不當に勞働者の自由を壓迫し種々なる人道的罪惡が行はれるのである。

夜業は當然寄宿舍を必要條件とする。大正九年末に於いて工場法適用工場總數二萬五千五百五十九の中一萬五百七十は寄宿舍の設けがある。而して婦人勞働者の半數はこの寄宿舍生活をなして居るのであるが、これは夜間作業と共に、風紀德操上より見て悲しむべき影響を及ぼしつゝあるのである。從來より寄宿舍に於ける婦人勞働者の風紀德操に關しては、しばしば其改善を云々する者あるを聞くのであるけれ共、夜業を禁止するに至らざれば、其根本的改善を行ふことは困難であると信ずるのである。

されば我等は、工場法の中に、寄宿舍を國家が監督すべき一條項を追加制定し、夜業禁止より、寄宿舍の徹廢に至る迄の期間中は、監督制度を設けることは、刻下の急務である。

今や先進國に於ける夜業禁止は、數十年乃至百數十年以前に解決されたる問題であつて、我國の如きも、前述の如く第一回國際勞働總會に於いて、條約案として採擇せる責任を有するものである。故に、國際信義の立場より云つても、之が實行は大なる意義を持つものであることを確信するものである。夜業は斯くの如き弊害を有し、斯くの如き廢止すべき理由を有するのである。眞に人道を解し眞に國を憂ふるの士は、希ば我等が請願の趣旨を贊同せられて其貫徹の爲めの努力を與へられんことを。



悲しき母性

千葉龜雄

スウエイデンの現代作家、グスタアヴ・ヘルストレエムは、かつて新聞外國通信員であり、短篇小說や長篇小說も澤山あるが、殊に近代の社會狀態から見た人生を捉へるところに一種の鋭どさがある。ここに出した梗概では、近代職業婦人のみじめな淋しい性的生活と、そこに芽ぐむ、強い、悲しい母性愛がある。それに日蔭に咲く白い花のやうな、あえかな戀愛が、同情ある省察の中にもつれあつてよく現はれてゐる。二人の性格描寫も、内から細かに考へられて居る。しみじみした情緒に滿ちたものだ。恰好なプロレタリヤ小說の一典型である。

一

四十五度と云ふ寒さの、雨の降る秋の日であつた。失業者大會がをはつて、襤褸らしい連中が、ぞろぞろと小雨の中を歸つてゆく。

エンマ・アントンゾンも、後から歸らうとすると、丁度この會へ來た、失職した女友達に出つくわした。その女と云ふのは、年頃もエンマと同じで人妻で、この頃まで、或る大きな紙工場で働いて居たのである。が、今は彼女も失職した。當然二人の會話が、愉快なものであるべき筈がない。一体が、四十五にもなつた年増の職業婦人同志が、お互ひ、面白い話を持合せるなど云ふことはまあ、殆んど無いわけのものだし、ましてやそれが、この失職の憂き目を見てる御難どきだ。それにしても、相手の話は、エンマを不愉快にしたばかりではない、彼女をすつかり怒らしてしまつた。なぜなら、彼女は、一週四日づゝも辛い働きづめで、どうにか凌いでゐるのだ。それなのに相手の女は、さも自分を救つてくれる餘裕、いや義務でもあるやうに話すのだから。が、人間と云ふものは、どんな場合にも物の筋途はつけて置かなくちやならぬ。なるほど、暮しから云へばエンマは獨身で、それに相應つましく生きて居る。けれども相手の女には亭主が在るのだ。

『お前さんには御亭主があつてさ、彼までが別に解雇された譯でも無いぢや無いか』

と詰ると、相手の女はしやあしやあして答へる。

『でもね、エンベルグと私の間には、何せ、七人も子供があるんだからね。やりきれないのよ』何も子供が多いことは、自分の故ではないのだ。そして言ひ足すのだ。

『が、お前さんは、子供がないんぢやないか』

『だつてさ、私には亭主がないのに、子供が有る筈は無いぢやないか。それともお前さんは、私が若い頃に、外の女達のやうに、男をあさり廻らなかつたのが悪いと言ふの？さうなの……』

『いゝえさ、たゞお前さんには子供が無いから私達より暮しが樂だと言つたゞけのことよ』

『それはさうかも知れないが、何もお前さんが仕事を失したから、私までが仕事を失して、一緒にならねばならんと云ふ譯は無いわね。』

二

夜番がやつて來て、電氣を消した。もう出てくれと云

ふのだ。けれども、エンマだけはじつと立つて居た。エンマは、今出て行つたばかりの、女友達との會話を、もう一度胸にくり返して、すつかり恥かしくなつたのだ。

なるほど話の機みで、また理窟から、自分があゝ云ふのが正しいと思つたのであるが、考へれば確かに間違つて居る。自分は確かにエリン・エンベルグよりも楽に暮して居るのだ。それなのに、失職して、あんなに悄氣て居る友達に對して、勝ち傲るやうな優勝者の態度をなぜ探つたのか。それが溜らなく恥かしくも、悲しくも思へた。溜らなくなつて、そこにうろうろして居る夜番をつかまへて、自分の經歴を話し出した。私は十六の歳からこの工場で働いて居ます。別の言葉で言へば、今日まで廿九年も働いて居る。もう五十に足を掛けやうとする自分が、若い頃、男狂ひをしなかつたとて、咎められる理由がどこにあるか。外の娘共のやうに、その爲めに、悲惨な運命を負はなかつたとて何でそれが悪いか。またそんなに長く一つの仕事をやつてるのだ。それを續けて居たとて、悪い權利とでも云ふものがどこにかあるのか云云。滔々と饒舌る。それに夜番の男が首をつゞめて口を挿んだ。

『こんな腐れ切つた時代に、そんな風に暮す人間が居るのは確かに好い事だね』

けれどもエンマには、そんな煮え切らない批判が慊らなかつた。が、このやくざ者から、それ以上頭のよい意見はもう聞けさうもないので、ふんと云ふやうな調子で部屋を出た。

が、彼女が玄關を出やうとした時、驚いて一歩後じさりをした。と云ふのは、彼女は確かに何者かの影をそこに見たのだ。見たと思つたのだ。影のやうなものが、すうと梯子段を上つて廊下の方へ消えた。何んでも梯子段がきしんだやうな氣がする。何だらう。鼓動が止るほどの驚ろきと怖れで、その正体が何であつたかははつきりと見極めなかつたが、きつと誰かゞ、自分の跡をついて行くのでは無いか。自分が、いくらか暮しが楽だと云ふので。何かを求めようとするのだ。……………………

と、活動寫眞で見た泥棒の話が折悪しく網膜に浮き出して來る。溜らなく怖ろしくなつた。夜番に、誰れかゞ梯子段の所に隱れて居ますよと叫んだので、夜番がすぐやつて來た。階段から廊下をずつと見上げた。

三

『あゝ、また彼奴か。おい出て行けよ、こゝで泊れぬ位

ゐはよく判つてるぢや無いか。もうこの週間ばかりでこれで三度目だよ。お前だつて取締り法は知つてるだらう』
叫ばれて、隠れて居た人間が、監守の前へやつて來た。男だ。青年だ。青年といふよりも、まあ少年だ。恐ろしく瘦せこけて、黒い瞳をして、鳶色のもぢやもぢやな髮の毛が、濡れしぼれた運動帽の下から食み出して居る。顔が極度に青白いので、その黒い眼が、皮をかぶせた骸骨顔面の、窪んだ眼窩の穴のやうに見える。上衣の胸が廣く開いて、そこから覗いて居るシャツが、古くて茶色になり、上衣は、雨と塵で色が褪めた上にぼろぼろになつて居る。彼は伏目におづおづと、夜番の顔のあたりを見上げながら、何か求めるのだが、戸外の烈しい雨の音で聞き取れない。夜番は言つた。
『困るだらうな。そりやこんな腐れ雨の日だ。何もベンチを一番貸す位ゐ出來ぬ事は無いが、何分寒いんでな。お前が今まで居た船の上のやうによ』
それから彼はエンマの方に向き直つて、『この男は元水夫なんだが、寢る場所がないんでね』
青年の青い顔の上を、さつと血の色が掠めた。とにかく、寢る所が許された感謝の光りであらう。このほつとした満足の血の感謝が、忽ちエンマのやさしい心を動かした。どうもこの青年は、有り觸れた浮浪漢では無い。耳を澄すと、雨の叩く音が刻々激しくなる。青年を見ると、薄い着物を見て、黒い求める瞳が、ほつとした喜びに燃えてゐる。この視覺と聽覺が、またエンマにいろんな事を連想させる。彼女は今まで雨を通さない、つやのある黒い雨着を着て居る。家へ歸れば、自分の借りた部屋には、小さくともストーブの火が燃えて居て、ベットと長椅子が備へてある。するとエンマとの會話が、また赤い糸筋のやうにつながつて來る。お前さんは『我々よりも樂に暮しとるぢやないか』から考へて來ると、彼女は良心に鋭どい痛みを受けた。そして、この青年の今の境遇と、先きの喧嘩が一つにもつれ合つた。それからそれが融け合つて、突嗟に、かうした決心を彼女にさした。
『お前さんは、今夜は私の長椅子で寢るがいゝわよ』
それを聞いた青年の顔には、もう一度、潮のやうに紅い色が浮んで、柔らかい微笑が、可愛い唇を一寸ゆがました。

四

彼女はこの青年を救ふと云ふ心持の中に、憐れみと云ふよりも、もつと外の何ものかゞ動いて居るやうにも思つた。そして、いきなり尋ねた。

『お前はいくつ？』

『十九です』

『さう、私はもう四十五だ。お前さんは、私がお前を泊めて上げるからとて、何も妙な話だとは思はんでせう。そしてこの人も、何も妙な事に考へぬでせう。ね』

彼女は、青年の方は見ずに、夜番にかう云ひ掛けた。彼女は青年に同意を求め、夜番には證人になつて貰はうとしたのらしい。が、青年は返事をせずに、單に、一寸妙な薄笑ひをしたゞけであつた。自分はたゞ飢ゑと寒さの救ひを求めて居るのだ。それなのに、それ以上の、變な疑ひをかけられるのは、いかにも苦々しいと云ふやうな心持らしかつた。

が、とにかく二人はそこを出た。青年は、上衣の襟を引上げて頭をつゝみ、雨の中を彼女の後からついて行く。飢えて、濡れしよぼれた宿無し犬が、急に親切な言葉を聽いたそれのやうに……。

五

彼はそれから六週間も、彼女の長椅子の上に寝て居た。が、エンマはそれに對して、別に苦情を言ふべき筋が無かつた。青年の名はテオドレであるが、彼れは氣性の穏やかな、親切な人間であつた。人ずれが少しもしてない。何事にもいそいそと働らく。いつも彼女よりも早く起きて、着物を着て、顔を洗つて、暖爐に火をたきつけて、庭へ水を汲みに行く。その中に彼女が起きて、貧しい化粧をして、食事をして、戸を閉めて仕事に行く。五時半になる。彼女の足音が、階段から聞こえて來ると、出て來て戸を開けてくれるのはいつも彼れだ。彼はまた別に彼女が頼まぬのに、手桶に水を汲んで來る。燈火を點ける。それから翌日の薪を運ぶために小屋へ下りて行く。これもみな、彼れが自分から進んでやるのだ。エンマもまた、別に、家に泊らして居る以上、それ位ゐの仕事をせよと云つた譯ではない。けれども、彼女は内心、……

『お前はどうせ、金持の妻君か何かを手に入れて、のらくらと暮す質の人間だらう。昨日は二十錢、今日は一圓とせびる！が、お氣の毒だが、こゝぢやさうは行かないよ。第一、私がかう年を取つてゐては、そんな手管に引掛るわけにはいかぬのだからね』……………

と、自分でこんな事を言つて、自分の拔目のない思ひ付きに得意になつて微笑するのであつた。

が、二週間も經つたが、そんな心配は全く無駄になつた。青年は依然として從順で、その上、一錢の金さへも求めたことがない。で、彼女にはいくらか解りかけた。

彼が普通の人間と違つて、じつときまつた場所だけに止まり、そして働らく事を厭はぬのは、彼が工場勞働者でなくて水夫だからだ。それからもう一つ、彼れが自分の着物を縫つて、綺麗にする手際に驚いた。土曜日にはきまつてシヤツと下ズボンを洗ひ、日曜の朝には、靴足袋を繕ろふ。が、或る時は一時間半も極端に何もせず、頬杖をついた臂を膝にのせて、じつと向うの方や床の上を見つめて居たり、或ひは天井を見据ゑて居る。これも水夫生活の習慣の一つであつた。

六

が、彼は大ていの水夫のやうに、酒は少しも飲まない。たゞ夕方に一度、ポケツトから卷煙草を出して喫ふ事がある。悪い癖と言ふなら先づそれ位ゐなもの、外に珈琲が好きらしい。

彼女は、何故か、自身でも解らぬが、彼に向つて、食事をしようぢやないかと彼女から勸めた事がない。恐らくそれは、男は自分で食ふ働きをすべきだ。女から食はして貰ふべきぢや無いと云ふやうな、原始生活からの女性の意識が、彼女の血液に殘つて居る爲めかも知れない。が、彼女はまた、彼が職業が無くて居る間、肉體や精神を、どう始末して居るかなどは、解らないし、また尋ねもしない。が、それは彼女の心の底に、そんな事は知る必要がないぞと囁やく聲が、彼女自ら知らずに在る爲めでもあるらしい。

で、彼れの行動については、別に不平を云ふがものは一つもないのだが、それでも、女の部屋に男が同居するのは、隨分困つたり、迷惑したりする事もあつたのだ。

たとへば、夜、闇い中で着物を脱ぐ。もちろん彼女は衝立が欲しいと思つた。そしてまた、安くて古物商から買へるのだが、それをまた躊躇した。と云ふのは、その爲めに、それが彼等の何でもない間を割いて、關係を全く別なものにするだらうと云ふ懸念だ。が、彼女が、なぜさうなるかとは、はつきり說明されない。たゞ衝立を考へると、何か知ら不愉快な感じが起る。それぐらゐならと、やはり普通り、暗い中で、着物を脱ぐ不快の方を擇ぶのだつた。

所が、工場には、深山の男女職工が居る。中でも女工は口がうるさい。口がわるい。よくテオドレを擔ぎ出しては彼女をいぢめる。

『見ろ、貞操のお手本様を。一度、迷つてしまつたら最後、どこまで墮落するか分らんもんだよ！』

が、エンマは、別に良心を持たぬ譯では無い。また立派に二人の間が、何でも無い事を言ひ切れぬ譯でも無い。それに彼女も出來るなら、彼から逃れたいとは思つて居るものゝ、さて、彼が、仕事を見付けるとなると容易で無い。工場には、田舍から出て來て、職を求めて居る青年がうんとある。それなら水夫はと云ふと、この年は非常な不景氣だ。澤山の船が、運ぶ荷物が無くて、波止場にごろごろして居る。その上、月は十二月だ。この寒空に、一文無しで、どうしてこの青年を往來に追ひ出せるか。で、たとへ不愉快でも、やはり毎晩暗やみで着物を脫いで居る外は無かつた。

七

けれどもその日その時が來た。

それは十二月の半ばであつた。彼は今迄、じつと床を見つめて居た眼をエンマに向けた。そして、いろいろ考へた揚句、自分は軍艦へ住み込む決心であると細かに話した。が、それがエンマにはあまり贊成出來なかつた。なぜなら、彼女には、それには議論以上の深い理由があつたから。他でもない。「陸軍」「海軍」「入營」と云ふやうな言葉は、彼女の心眼に、何か知ら血紅色のものを連想さした。もつとやかましく云へば、意識しない反軍國主義と、徵兵制度への反抗などが、彼女の憎惡の背景になつて居た。或ひはプロレタリヤ國際主義に闘する社會主義の論理が、血と肉の肉體を包む着物のやうに、彼女の頭腦に濃くこびりついて居た。なぜなら、彼女はあるものを見たから、何年も目撃したから。

何を？　それは「軍隊」「軍事教練」が、工場にどんな意味を持つかをだ。王が父達に向つて、軍役につく事を命令した時に、懐に子供達を持つた若い母達は、貧乏と悲慘の海をもがく外は無かつた。瘦せ衰へた老母達は、また工場へ還る外は無かつた。誰も彼等を扶養する若人が居ないから。……年々のかうした光景は、彼女の心と頭腦と、神經と筋肉を、全く軍國主義の憎惡で鍛へ上げて了つた。

彼女は言つた。「テオドレ、お前さんはそれをクリスマスまで延ばさないの？　新年になつたなら、工場にもまた仕事が出來るだらうし、すれば海軍などに行かなくとも……」そして、二人がじつと顔を見合した。

これでテオドレの軍艦入りは延びた。けれども、エンマは數日經たぬ中に、自分の胸の中に、段々と妙な心の動きが忍び込んで居るのを感じて來た。で、彼女が彼の

軍艦行きを止めたのは、單に軍國主義に對する憎みばかりでは無い。何か知ら、落着かない情緒が、彼女の胸にゆらいで來たゝめだ。それは彼女がずつと前に、或る男性達に對して經驗したもので、もう疾くに死んで了つた筈のその情緒であつた。恐らくそれは昔ほどに强烈なものでは無からう。けれども、それは嘗つてあつたものだ。

殊にそれは彼女の人生の最後の經驗でもある。彼女は、もうそれを自分から追ひ拂はうとはしない。却つてそれを歡迎し、その中に自分を抑包み、必死にそれに縋り付かうとした。落ちて行く太陽の最後の光線に、どこまでも縋り付かうとする人のやうに。

八

で、彼女は時折自分で微笑する。「こんな事を考へる私は、まださう年を取つては居ないのだナ」

工場で、例によつてからかはれると、彼女は、もう思ひ切つて言ひ返す勇氣も無かつた。で、噓をついて、「彼はもう出したのよ」と答へるのであつた。

彼女は古物商から隔障を買つて來てベッドの前に置いた。それから彼女は彼に向つて、誰も見ないやうに、夜遲く歸つて來てくれと、部屋の鍵を渡した。すれば彼が歸つて來ても、もう彼女が起きて、戶を開けてやる必要が無い。そして彼女は闇の中に寢て待つて居る、すると彼はくつ足袋だけの足をすり足して彼の部屋へ入つて行つて、そのまゝ寢てしまふのだ。

が、彼女は一方で、なぜ彼がそんなに遲く歸つて來ねばならぬのか。何をしてるのか。友達でも持つて居るのかと怪しんでも見る。彼が歸つて來て、着物を脫ぐのを聞かねば、彼女はどうしても眠れぬのだ。いや、彼が寢てしまつてからでも、長い間じつと目が覺めて居る。彼は彼女にとつて、もうみじめな邪魔者でも無い、社會の不平等に押しひしがれた失職者でも無い。それは緊張をもつてこの小さな部屋を滿し、眠を奪ふ闇黑の神秘力であつた。彼の深い、靜かな寢息を聞いて、彼女は始めて眠れた。

が、その眠りは輕かつた。もし彼が一寸寢がへりをしたり――彼は度々やる――またはその眠の中に、何か抑へ切れぬ壓迫で、苦しめられて居るやうな溜息を聞くと、彼女はすぐ身震ひをしながら起き上り、闇の中をじつと見すゑる。その部屋の重苦しい壓迫を破るやうな、何かの解決を求めながら……また、さも何か起るべき或る物を待ち設けるやうに……。

九

クリスマスが來た。彼女は乏しいながら、その夜の料理を整へた。テオドレは、一寸した仕事の賃錢で買つた新らしい下着や、カラアや、ネクタイの箱を下げて歸つて來た。

　が、そこにはクリスマスらしい感じは無かつた。が、彼は何時になく雄辯であつた。そして彼は、幼い頃のクリスマスの話をした。彼の父は水夫であつた。むしろ船大工であつた。いつも長い航海をしてるので、クリスマスには大低家に居ない。その晩になると、母は始終耳を澄して、暗闇の中をじつと見つめて居る。何か音がしないか、掛聲がないかと聞いて居るのだ。もし天氣が惡くて、嵐が窓ガラスにでも吹きつけようものなら、彼女は身ぶるひしながら、ガラスに額を押つけて、心配氣に思ひ惱んで居る。子供等が、母の心配がわかるので、いろいろと慰める。たとへばこゝが嵐でも、お父さんの居る海が天氣が惡いとは限りませんよと。けれども、母は頭をふつて聞入れない。實際彼女は結婚してから死ぬまで夫の居るだらう土地の天候が、自分の居る町と違ふのだと云ふ事を、全く解らずにしまつたらしかつた。その後父からは長い間便りが無かつた。が、やがてロンドンの總領事館から通知が來た。滑車がひつくり返つたゝめに彼が頭蓋骨を打たれて、その儘死んだと云ふのだ。ハリファクスで起つた事なのだ。

　この絶望で、彼女はすつかり身體を惡くしてしまつた。氣さへ少し變になつた。たとへば、彼女は結婚するまで、父に對して澤山の手紙を書いた、それを父が箱に入れて、航海中始終持つてあるいて居た。それが欲しいと母が願つて居たのだが、どうしても送り歸されぬので、猶ほ氣を落したなど云ふ譯もあつて、數年後につひに死んでしまつた。

　彼は海で、港で、いろいろなクリスマスを祝つた。船でならば、船長が聖書を讀む。實際航海すると、誰だつて、晩かれ早かれ宗教的になる。父も母もみなそれであつた。彼等は信心深い家庭で育てられたからだが、さればとて、朝から晩までお經を上げたり、神樣のやうにならねばなどゝ、口癖に說教してる譯では無い。たゞ、死と云ふものは、思ひも掛けぬ時に、不意にやつて來るものだなんと云ふ無常の觀念だ。たとへば、結婚してからは、酒の匂ひさへもかゞない、あの眞面目で人柄な父でさへも、突然、機械に撲たれてぽつくり死んでしまつた

のだ。そりや、船大工だ。滑車が落ちて死ぬぐらゐの事は、大した不思議とは思はれぬにしても。

一〇

が、エンマは默つて坐つて居た。別に彼の話をよく聞いて居る譯でも無かつたと云ふのは、彼の話の世の中と云ふものは、彼女が工場だけで知つた人生とはまるで違つたもので、なるほどかうした世界もあるかと思ふと、唯だ驚ろく外は無かつたからだ。

が、この青年が穏やかで、生帳面な氣質も、なるほどこゝから來るんだなとは解つた。つまり彼は若いけれども、彼女とは全く違つた澤山の經驗を積んで居るのだ。と思ふと、彼は彼女には彼女よりも年寄りのやうにも思へる。そして彼は彼女よりは、もつと違つた世界に居るのだが、それだけ、また懐かしくもなる。たとへば、彼女位ゐの年配の職工ではこんな違つた信仰がある事も知らぬし、また死を、こんな風に考へる時も無い。いや、彼女自身すらもそんな信仰は之まで知らなかつたのだ。それなのに、彼は年にも似ず、澤山の事を知つて居る。外國も見た。神と死についても考へる。……無限な思ひに包まれて、彼女はたゞぢつと彼を見つめて居た。

彼はまた口を開いた。

「自分は金を蓄めて勉強をして、士官にならうと思ふ。それから航海をして船長までにはなりたい。こゝに居るとたゞ無駄に日を暮して、痩せきつて、馬鹿になるばかりだから」

「お前さんがも少し待つて居るなら、今に、もつと好い運が廻つて來ますよ」

すると彼は肩を一寸ゆすつて、「もうこゝぢや遣り切れないんです。第一、さう何時までも厄介になつて居られる譯は無いし……。僕だつて働らくのがいやで、かうして居る人間で無い位ゐの事は解つて呉れるでせう。もしか斯うして居る中に、お前さんの仕事が無くなつたとしたら、私はどうしたら良いものか」

「ぢや、私が、お前さんを追ひ出すと思つてるの、さう？」

「いゝや、さうぢやありませんよ。」

が、エンマは、ぢかに、彼の顔を見やうとはしなかつた。彼女の心の底で、何か知ら、壓迫するものがある。彼女は、なぜ彼が、こゝを出やうとするかは朧ろ氣にわかつて居る。引き止める途の糸口さへついたなら、彼女は、今までよりも、もつと、彼れを引止めやうとする思

ひが强かつたのだ。

この晩は二人とも早く床に就いた。彼女は例によつて寢つかれずに、じつと闇を見つめて居たが、不意に飛び立つた。何が起つたのか。彼がどうしたのか。彼は何で惱んで居るのか。さうだ。彼が泣いて居るやうに聞える。彼女は片臂をついて、床に起き上つて、息を殺して耳をすまして居る。

さうだ、彼が泣いてるのだ。彼女の胸の鼓動が激しく撲つた。が、彼女はまだ動かうとはしない。

何でも彼れは、その咽び泣きを、彼女に聞かせまいとするらしいのだ。何とか慰めてやる途は無いものかな。彼女が考へる。その中に、彼れの鼻聲は、胸を裂くやうな啜り泣きに破れてしまつた。彼女は我知らずベツドから飛び下りて、長椅子の方へ急いだ。そして彼の頭をかゝへて、彼の側に倒れた。その癖、彼女が慰めて居る言葉が何を言つてるのか、第一、自分の今の氣持がどうなのかは自分で分らずに……。

二

夜が明けた。その夜に何が在つたかは、二人とも口には出さなかつた。

たゞ彼女は、彼が彼自身を彼女を輕蔑するらしい自愧を、避けるやうな彼の眼の中に見るのであつた。が、それが何であらう。夜が來ると共に、彼女の勇氣がまた還つて來た。譯の分つた人間が何と云つた處、これが彼女の最後の、本當に最後の戀――眞の、眞の最後の戀ではないか。これから後はたゞ老年があるだけだ。工場と老年の外には何も無いのだ。彼がどんなに彼女を輕蔑しようと、闇黑の中では、彼女はもう何とも思はなかつた。

やがてはそれも輕蔑でなくて、もつと甘いものに融け込んでしまふだらう。そんな懸念の外は何もなかつた。そして、そこに苦い勝利の誇りがあつた。なぜなら、今まで在る姿の後にあるものは、彼がいつか話した死、老年と呼ぶ死があるだけぢや無いかと、そんな風に考へるほど。

こんな風にして二月の半ばまで續いたが、或る晩、彼はいよいよ軍艦に乘り込む事になつて明日出立する積りだと話した時は、相變らず物靜かで、別れの悲しさが少しも見えない、むしろ自由の解放を喜ぶやうにも思へた。

「テオドレ、やはり行くのか」

たゞそれだけ話した彼女は、一週間少し前から、自分が母になり掛けて居る事が解つてたのだ。が、彼女はそれ

について何も云はない。話した處がどうなると云ふのか。彼女は彼から何一つ求めやうとはしない。名さへも求めない。十九の靑年から何が求められる？　それに話したとて、たゞ彼れから醜い、馬鹿々々しいものとして受入れられるがお終ひだらう。それに、も一つは、生れる子供を、彼女の晩年の唯一のものとして持つて居たい。誰にもやらぬ、父もいらぬ、名もいらぬ。たゞ世界に在る、彼女一人が專有する唯一のものとして持つて居たい。

二

彼女は何度も考へてさう決めた。なるほど世の中に、こんな事が明るみになるのは辛いに相違ない。が、起つたものはどうしよう。有るまゝにする外は無い。その中に世間は忘れてしまふだらう。

子供が生れても彼女は工場通ひをするだらう。多くの女工のやうに、朝は托兒所へ預けて、夕方には、灰色の毛布に包んで歸つて來る。夜一晩はもう自分のものだ。胸に抱いた肉身の暖さを感じ、そのやさしい息を聞くだらう。かくて……彼女はもう世界に取殘された淋しい一人ではないのだ。彼はやがて學校へ上るだらう。十六やそこらになつて、彼女が年を寄つて、もう工場に行けなくなる。すると、彼は、自分の代りに工場へ行くだらう……。

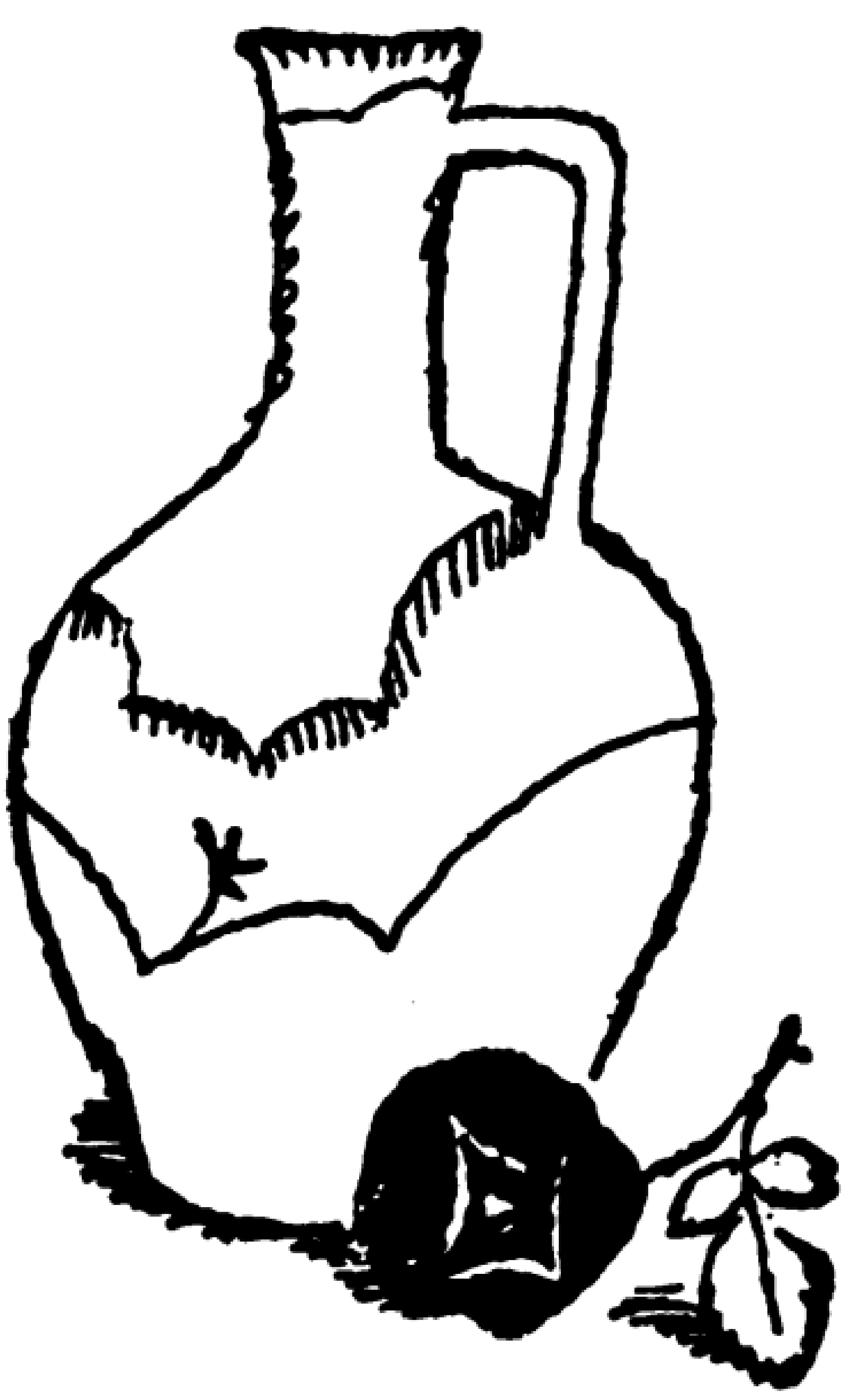
彼女はテオドレを見上げた。

「お前さんも行くんだわね！」

彼は返辭の代りにうなづいて見せた。何か一言でも言ふと、口說でも出るかと怖れるらしく。

あらゆるものは、凡てまた靜まり返つた。

――「女性」九月號より轉載――



活版印刷の一革命

◇特許第五〇八〇三號單式印刷法は活字及活版機械を用ひずして活版と同一印刷結果を收むるものであります。

◇これは無限大無限量の活字を貯藏して夥しき資金と場所を塞ぐ事を避け、文選、植字、解版、返字、ムラ取等の工程を廢して多くの人手を省き、磨滅に由る營業損無く、平版印刷法を用ひて輪轉式及オフセツト式印刷の能率益を完全に我ものとしたのであります。

◇この故に九ポイント組菊判百五拾頁位の雜誌は印刷部數五千部以內なら五日間で製本してお渡し致します。

◇そして其價は普通活版よりは三割安く出來ます。

◇活版の所謂組み版が安くつく故に小部數でも或時は謄寫版より速くて安くつきます。

◇ルビの附かぬものなら新聞、雜誌、書籍等一切の活版物をいたします。

東京本郷元町二
電話小二三九三

單式印刷合資會社

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十五年二月二十七日印刷納本
大正十五年三月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第四巻第三號

【定價金二十五錢】